

赤い星

統一赤軍に結集し革命戦争の大飛躍を

- | | |
|-----------------|---------|
| ☆ 特別アピール | 「赤軍」司令部 |
| ☆ 日本革命戦争の新たな局面 | R F 全国委 |
| ☆ 三里塚闘争を闘いぬけ | R F 関地委 |
| ☆ 中国共産党の外国攻勢と我々 | R F 全国委 |
| ☆ 6・17 闘争の勝利万才! | 上野 勝輝 |

第 2 号

1971.9.25

革命戦線全国委員会機関紙

☆革命戦争路線と大衆路線を堅持し、革命戦争統一戦線を形成せよ！

☆建党建軍遊撃戦に呼応し、大衆的ゲリラ戦・実力闘争、支援網を拡大せよ！

☆社共人民戦線派、ハ派ソビエト派を解体し、革命戦争派に統合せよ！

☆大陸革命戦争・帝国主義国武装闘争を、世界革命戦争の戦略的反攻・世界プロ
独樹立にむけて統合せよ！

☆安保粉碎、日帝打倒、プロ独樹立！

序 文

6月中旬沖繩返還協定調印阻止闘争のさなか、爆弾闘争と機を一にして発刊された第一号から3カ月を経て第二号を読者の手元にお送りする。第一号は、部教の少なさにもかかわらず、大きな反響をよび起した。権力とブルジョア新聞は、第一号を論評して警戒心をかきたてた。無数の大衆のなかからは概して好意的な反応をうけとった。

第一号から第二号にまたがる3カ月の時期は歴史的な時期と記されるだろう。様々な闘争、分裂、再編、激動。巻頭論文『日本革命戦争の新たな局面』はこの歴史的時期を位置づけ総括している。

またこの時期は世界政治においてもニクソン訪中発表、IMF体制崩壊があり文字通り世界の激動期であった。本号では特に前者について獄中上野同志に寄稿を願った。世界政治、経済分析は以後も引き続き設けていく予定である。

本誌は革命戦線の機関誌である。党及び統一赤軍からは別に機関誌が発行される。我々は本誌が本格的武装闘争を闘っている諸グループ、諸個人の手元に広く行渡り我々と有機的に政治的、組織的、軍事的結合を勝ち取ることを望んでいる。我々は読者に本誌の配布網を渡して広範な武装闘争の支援網を形成すると同時に、自力更生の精神でもって大衆的ゲリラ戦を闘い、いよいよ本格的に開始された日本革命戦争の最前線に立つ事を夢請する。

我々はまた本誌を、獄中諸同志の意見の発表の場としても、赤色救援会からの報告の場としても活用していくつもりである。前者は従来の獄中闘争とは全く異なった高度の内容を有しており、革命的人民にこれを広く発表することは我々の責務であると考えている。また赤色救援会からは、我々に対する権力の弾圧がいかにか一救の想像を越えたものかを暴露してくれるだろう。当面の目標として我々は本誌のこの秋からの月刊を予定している。

読者は本誌と同時に、新たに発刊された統一赤軍機関誌「銃火」並びに雑誌「序章」の獄中同志の諸論文をあわせて読まれることを要請する。

特別アピール

統一された「赤軍」(共産主義者同盟「赤軍派」中央軍)の下に結集し、

徹底的に遊撃戦を闘い、日本革命戦争の大飛躍を!

「赤軍」総司令部

全国のプロレタリア兄弟諸君!
先進的學生、知識人諸君!

一九七一年七月十五日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並に日本共産党(革命左派)神奈川県常任委員会は、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。

この決定は、六〇年代日本階級闘争の革命的伝統を継承、飛躍させた畫期的地平にかちとられた。この畫期的地平とは、六〇年代後半の日本プロレタリア人民の偉大な國際主義的暴力闘争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、「人民の軍隊がなければ、人民のすべてではない」プロレタリア人民の軍隊に發展させた、「プロレタリア革命の魂」の復活ともいふべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党(革命左派)の「党の軍隊」として建設された中央軍、人民革命軍は、この畫期的地平を自ら切り開き、歴史的な武装と遊撃戦を確立した。大阪・東京戦争——大菩薩闘争——米軍基地爆破闘争——H・J闘争、こそ、日本階級闘争に於ける「プロレタリアートの武装した國際主義」の歴史的復権、革命戦争の大胆な登場をもたらしたのである。

十二・一八赤塚交番襲撃闘争——日本プロレタリア人民と世界プロレタリア人民を固く結びつけた「発号」H・J闘争後の敵権力の氣狂いじみた弾圧をはねのけて貫徹された、この英雄的闘争は、中央軍——人民革命軍を「革命戦争——遊撃戦」の一本の赤い糸で固く結びつけた。ここにはじめて、「プロレタリア革命の利益——革命戦争の利益」の為に、日本プロレタリア人民の利益の為に闘う「盟友」、新しい革命的団結、がかちとられた。

産声を上げた「遊撃戦——革命戦争」の赤い炎を守り發展させる勇氣と確信をもって、二・一七銃奪取、二〇三月連続資金奪取闘争への前進が続けられた。それは、アジア武装人民の米帝國主義侵略軍、カイライ政府軍に対する大勝利と共に前進したのであり、アメリカ帝國主義の後退——戦略転換——日本帝國主義の進出、という新たな攻防關係の煮つまりの中で、帝國主義ブルジョアジーに対する「台風の目」であった。日本帝國主義権力は、この赤い炎を全力で絶滅せんとし、プロレタリア大衆はさまざまな形態でこの火を押し包み、その下に結集していった。六・一七機動隊せん滅戦、七・一〇三里塚マイイト闘争といまや革命戦争は日本プロレタリア人民の中にはつきり

定着しようとしている。中央軍——人民革命軍の統一、この壮挙は、これら血と勇氣によって色どられた闘いの歴史的総括であり、新しい出発である。

統一された革命軍は、プロレタリア世界革命の革命的伝統を打ち樹てたロシア赤軍、中国赤軍にならない、その名称を「赤軍」とする事に決定された。「赤軍」は世界各地で闘うプロレタリア兄弟の革命戦争とその利益を全く同じくし、プロレタリア世界革命戦争の一翼を担う。米帝國主義をはじめとし、日本帝國主義、西独帝國主義を支柱とする世界帝國主義ブルジョアジーの國際反革命戦争を絶滅し、全世界プロレタリア人民の眞の解放——世界プロレタリア独裁、世界共産主義建設——をかちとる事、これが「赤軍」の任務である。

プロレタリア兄弟諸君!

統一された「赤軍」は、日本帝國主義と闘う全ての人民、労働者、學生、農民、在日諸民族人民の闘争を支持し、その利益の為に闘うと同時に、アジア被抑圧人民に対する侵略、抑圧、反革命同盟を再編、強化しようとする日本帝國主義——米帝國主義を打倒する闘いを貫徹する。「赤軍」は遊撃戦を徹底的に闘い、革命戦争の大飛躍をかちとる中で、日本——アジア人民を分断、対立させる策動、アジア——アメリカ人民を対立させる全ての野望を粉碎し、日本・米帝國主義の侵略、抑圧、反革命軍を解体する。

「赤軍」はプロレタリア革命党の指導の下に、世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁、永続革命等、マルクスが提起し、レーニンが創造的に發展させたプロレタリア革命の原則的観念、毛沢東が提起した持久戦戦略とその陣型、及び遊撃戦の戦略問題の教訓をもって武装されたプロレタリア軍隊であり、帝國主義ブルジョアジーを打倒すること——プロレタリア人民を革命戦争に組織すること——マルクス・レーニン主義を創造的に發展させること、を同時一体的に闘い、成長することによって成長する革命軍である。

「赤軍」は世界・日本革命戦争に献身的に参加しようとする全てのプロレタリア人民に、その門戸を開放している。「赤軍」こそ、開始された日本革命戦争を代表する、プロレタリアートの「武器」であり、「赤軍」の成長こそ、日本革命戦争を前進させる「力」である。

武装し、闘うプロレタリア人民と一体化した「赤軍」は遊撃戦の全面的展開の中で全人民が総蜂起の陣型をかちとる推進力である。

「赤軍」は、全人民総蜂起——日本革命戦争の勝利から、休むことなく米帝國主義打倒、ソ連社会帝國主義打倒——世界革命戦争勝利へ前進し、世界プロレタリア人民の軍隊——世界赤軍の中核を担うだろう。

全国プロレタリア兄弟諸君

「赤軍」は、ここに最初のアピールを送る。

「銃火」と名づけられた赤軍機關紙は、これ以降かわるもななく日本帝國主義権力との闘争の最先端から諸君の手に送り続けられるだろう。統一された「赤軍」の下に結集し、大胆に遊撃戦を闘い抜こう!

統一された「赤軍」の下に結集し、世界——日本革命戦争の勝利をかちとろう!

日本革命戦争の新たな局面―つき進め勝利の道を―

一、建党建軍遊撃戦の発展と

大衆的ゲリラ戦の登場

①爆弾斗争の勝利万才

昨年十二月京浜安採共闘の交番襲撃、今年に入つての武器奪取、赤軍中央軍の強制収奪闘争によつて、本格的な火ぶたが切られた日本革命戦争は、今や新たな局面を迎えている。六・一七機動隊爆破闘争は、建党建軍遊撃戦と大衆の実力闘争の歴史的な結合を告げ知らせ、六九年以降蓄積され潜行してきた大衆のエネルギーを一挙に火をつけた。続いて起つた様々の斗争―成田の警備会社・名古屋高裁・成田署・警視総監公社・千葉地裁・審官公舎②Cの爆破、朝霞自衛隊員刺殺、更に、三里塚闘争でのダイナマイトの登場や大衆実力闘争の激化、これらの諸闘争がいずれも六・一七爆弾闘争の勝利に触発され、勇気づけられ、その影響の下に闘われていることは明らかである。

こうやってやるんだ、ということを教えたこと、革命戦争に於ける実例教育の偉大な証である。

六・一七以降の一連の闘いは、外的に与えられたものではもちろんない。それは、六九年以降様々な曲折を経ながらも蓄積され潜行してきた内部のエネルギーが、六・一七闘争という外的条件に刺激されて外化したのである。内的要因は、六九年以降の八派ソヴェト運動派（大衆の実力闘争）の陣型の硬直、カンパニア主義・合法主義への後退と内部分崩、革命戦争派の発生と成長であり、更に、この両者の対抗関係の中でばう大に登場してきたノンセクト大衆・ノンセクト戦闘団の存在である。権力は、今まで彼らの死角だった黒ヘル・ノンセクト戦闘団の発見・摘発に躍起となつている。ノンセクトの戦闘化と戦闘団化の傾向は、五・一九一五・三〇から既に明確に現われていたのであり、八派の分裂によつて更に拍車をかけられたとみなければならぬ。

一連の爆破闘争・自衛隊攻撃③Cは、大衆の自発的なゲリラ戦が登場したことを意味しており、ゲリラ戦が持続し、発展し、定着しつつあることを意味している。これに規定されて、大衆的

実力闘争も、六〇年代的な玉碎的、閉鎖的な性格（権力闘争の時代に入っているにもかかわらず、権力を組織する建党・建軍・革命戦争をつくりだす力量を、大衆実力闘争は、それ自体としては

もちえないが故に壁にお当たっている）をぬぐい去つて、革命戦争との結合のなかで独自の役割を果たそうとしている。我々は赤い星第一号で次のように述べておいた。「八派ソヴェト運動派の闘争陣型が硬直し、解体を開始していること、だが、革命戦争が未だ本格的な発展過程に入つておらず、その法則性を現わしていない故に、全ての運動を革命戦争の下に統合することができていない」というのが、現在の事態の特徴である。従つて、少数ではあるが、最も高度な質をもつて日本の階級闘争の全局を牽引して行きつつある。成長過程にある革命戦争と、数は多く広い領域にわたつて持続しているが、長期的には成長が止まって分崩過程にある大衆戦線（ソヴェト運動）とは、相補う関係をなしている。」

（頁六一）革命戦争と大衆戦線とのこのような関係、基本的動向は本質的には変わっていないが、わずかに数カ月の間に、革命戦争の方に重心を傾むけた形で前進してきたのである。これは、我々の革命戦争路線と大衆路線の正しさを立証するものであり、建党建軍・遊撃戦の発展を約束するものである。我々は、大衆のなかにゲリラ戦の組織と行動をもちこむ工作を、今まで以上に重視してゆかなければならない。

2 政治警察の治安悪化、破防法

民間協力に反撃せよ

権力は、革命戦争の芽をつみとらうとして先制的予防的攻撃を組織して、一時的な優位を保ってきたが、最近の一連の闘争に対しては完全に虚をつかれて後手にまわり、検挙も全くできないまま、受動的対応においやられている。彼らは革命戦争の根を断ちきることに失敗した。これこそ彼らの最も恐れていることだったのだが、権力は防戦に追いこめられながらも、新たな対応策をうちだしてきている。それは、実質的な破防法攻撃である。集会や採擷に夜間デモの禁止、事前検索、集会場、駅、道路での無差別検問、爆発物に対する部隊訓練、防護衣の強化（金属楯など）、爆発物の素材の流出、盗難の監視強化、貯蔵、消化、所持の規制、譲渡、護受、および消費の許可基準の監督の強化④C、又、八月十七日には「七〇年代の警察のあり方」が発表された。①一七・五万から二八万への増員。②国の公安にかかわる事件や広域犯罪捜査に一元的運営を必要とし、警察庁や管区警察局に執行部隊（捜査隊）をもつ。③警戒警ら活動の密化と的確な地域実情の掌握、機動化。④各県警にもRW特捜をつくり、審視庁にRW課を新設する。権力ブルジョアマスコミも、これらの対応策が所詮受身のものでしかないことを自覚しており、革命戦争を根絶するための民間協力の強化（国民の総スパイ化、自衛団、隣組の復活

②七〇) 重視している。私有財産防衛の意識をテコとした権力の
大衆への政治工作であり、上からの大衆組織化である。民間協力
粉碎の闘いは、今後の我々の一方の軸としなければならないが、
第一には、恒常的な人民の政治的動員、全人民的政治闘争の組織
化、大衆政治勢力の形成であり、革命戦争の堅持のなかで、誰が
敵か、誰が味方かをはっきりさせ、味方の勢力をプロ独権力の下
に組織してゆくことであり、第二には、指名手配書や自衛団、権
力への通報、民間スパイなど具体的に現われてくる行為や事実
に対して物理的な闘いを日常的に組織することであり、大衆自身
の手で民間協力粉碎の闘いを組織させることである。二つの領域に
於ける闘いを、我々は大衆戦線に強力に、かつ粘り強くよびかけ、
独自に組織してゆかなければならない。

3 自衛隊、米軍をせん滅し、反戦兵士

赤軍兵士を獲得せよ

基地攻撃、自衛隊員刺殺、或は、自衛隊沖繩派兵阻止闘争の高
まりのなかで、自衛隊、米軍との闘いが焦点にうかびあがってき
ており、自衛隊、米軍の反革命的対応が露わになってきている。
自衛隊は、朝霞自衛隊員刺殺後、全国の基地警備体制を強化して

とではなく、その政治的軍事的正しさを大胆におしだし、これを
武器として、自衛隊、機動隊員に政治的立場を鮮明にさせ、内部
分解、動搖、叛乱、味方への獲得をかちとることである。そのよ
うなリアルな政治が要求されているのである。

4 大衆実力闘争 戦略的包圍戦を拡大せよ

建党建軍・遊撃戦と大衆的ゲリラ戦の発展、敵軍への物理的闘
いと解体の始まりということと同時に、六・一七闘争であらわれ
た大衆的全人民的政治闘争として実力闘争とゲリラ戦の結合は、
三里塚闘争に於てはより一層鮮明に現われてきており、今秋の激
闘を約束している。七月末の三里塚闘争のなかで、ダイナマイト
が登場し、武器がエスカレートするとともに、党派やノンセクト
の部隊の更なる分解が進行している。成田著や警視總監公舎、鉄
動爆破②七〇の闘いが三里塚闘争と結びついていること、これら
の闘いが三里塚闘争を勇気づけ、更に高い段階におしあげている。
三里塚闘争の政治的軍事的質を堅持し発展させること、全国にお
しひろげ普遍化することである。(別稿「三里塚武装闘争を闘い
ぬけ」を参照せよ。

いるし、治安活動、支援後処への構えを濃くしている。七月末の
北海道での「空中機動大演習」は、インドシナ戦争で主役になっ
た武装ヘリを前面におしだした。米軍の教訓に学んだ自衛隊は、
四次防を修正して武装ヘリを実践配備し、五次防で大量配備しよ
うとしている。今までの兵員、物資の輸送用から地上攻撃への転
換は、山地の多い日本での反革命戦争・対ゲリラ戦用であり、ア
ジア派兵のためのものであることは明らかである。「新たな戦略
段階を規定するもう一つの要素は、軍隊との物理的闘争の始まりで
ある。すなわち、自衛隊が兵営の外に引き出され、大衆的な階級
的衝突の渦に引きこまれることである。(中略)

それは決定的転換を意味する。ブルジョア側の側からは、そ
の基本的政治が軍政へと転換してゆくこと、プロレタリア人民の
側からは、軍事が全体を把え、軍事闘争があらゆる闘いの中心と
なっていくことである。」(序章第五号・頁三一) 八木同志の指
摘する新たな戦略段階の始まりを見てとらなければならない。自
衛隊・米軍への工作と大衆的闘いと結合したゲリラ的攻撃を、ま
すまず大担に組織しなければならない。なお、朝霞自衛隊員刺殺
を、「一般隊員には罪はない。叛軍闘争に害を与える」という風
に考える党派がいる。これはレーニンも厳しく批判したように、
「軍隊を獲得するための死物狂いの物理的闘争」をぬきにして、
大衆的な獲得工作だけできると考える徹底的に日利見
主義である。必要なことは、自衛隊や機動隊の殺傷を否定するこ

二、八派の分裂と党派再編—革命戦争派の 大衆的政治勢力を形成せよ

①人民戦線派への転落とみせかけの急進主義

六月沖繩返還協定調印阻止闘争の過程で八派共闘は分裂した。
中核・四トロ連合と青解、構改、日向派とに。沖繩奪還か、返還
粉碎か、或は、八派主流派か、弱者連合か、という風にかしまし
く堅き立てている。直接的には中核と青解のへげ争いであるが、
深く考察すれば、六九年全国全共闘結成以来たまたまってきた一
拳にふきだしたものということができる。この点は大衆的実力闘争
の限界と飛躍の問題と同じである。

第一には、革命戦争の開始と権力との対抗関係の形成、重心の
移行という事情であり、大衆的実力闘争がそれ自体としては壁に
ぶちあたっていたことである。ビン・ゲバと全共闘、反戦軍団の
闘いが、警備の予防反革命的エスカレートの前に無力化し、全共
闘運動そのものも分解状況にあったこと。このなかで、一方では
ML派のように大衆の先進的部分に自己を溶体してしまう傾向(こ
れは、七〇年六月闘争に於て権力によって、又、内部的にも完

全な解体をとげた」と、他方では、革命戦争や大衆の合法的運動とも矛盾を深めながら官僚主義と闘いこみに転化し、合法主義一革マル主義一人民戦線派に転落してゆく傾向とが生じてきた。後者の傾向は、イ中核派の合法主義と闘い込みが、こそして、革マルへの思想的組織的身売りをした軍事反対派日向派が、又、ハ青解、構改の人間主義を下じにした組合主義、議会主義、社民への同化、として更に分化してきたのである。これが第二の要因である。

第三には、八派の合法主義、カンパニア主義、闘い込みにあきらないノンセクトの膨大な層が、六九年以降絶えることなく形成されてきており、八派共闘への有形無形の圧力をかけていることである。ノンセクトの部分は、一方ではこの間拡大されてきた新たな闘争領域（在日外国人、入管、部落、公害、リヴ、三里塚、叛軍etc）に進出するとともに、他方では八派から離脱しながら戦闘団化してきたのである。

したがって、今回の分裂は偶然的なものではなく、長期にわたって準備されてきたものであり、またかなり長期にわたって分裂が続くということは、両者とも戦闘的ポーズをとらざるをえないということであり、局面的には戦術的急進化の傾向が現われることがある。六月闘争はその一端を垣間見せてくれたし、各派とも爆弾闘争に刺激されて、たとえ口実だけでも「爆弾闘争時代」を宣言している。ある意味では、革命戦争派にとって有利な条件

しての日向一派は、「蜂起プロ独派」を潜称し、「蜂起戦争派、革共同両派紛砕」なる陳腐なスローガンをかかげて軍事反対派の本質をまるだしにしているが、その内容はといえば、地区共闘ソヴエト型組織作り、という革マルと同じく権力問題ぬきの経済主義である。青解の疎外革命論（人間主義）、分業論 国際的の反革命階級同盟論、ローザ主義 社民の本質については今更言うまでもない。共革党、共労党の構改二派に於ては、人民戦線への里帰りである。注意すべきは、共労党内の党内闘争の過程で、レーニン教条主義と毛派とへの分解が顕著なことであり、後者は三里塚、日本原etcの現闘部分であり、革命戦争派にひきつけられている。このような部分は各派ともに多かれ少なかれかかえているわけであり、意識的な働きかけが必要である。

①中核の人民戦線左派化と時期遅れの急進主義

中核派はどうか？彼らは、革命戦線派と弱者連合の中間に立っている。中核は、六九年安保決戦敗北以降、合法主義、カンパニア主義とセクト的闘い込みを強めつつ、守る会型労働運動を典型として公労協、民間に浸透し、青空パッチの選挙Mに典型的な地方自治体選挙を通じた住民運動の集約、更に、在日外国人、部落、被爆者、身障者等の被抑圧民族、被抑圧人民の運動の組織化と介入、自己批判運動を通じてIを計ってきた。この成果は中核の

となるが、勿論、両者とも本格的な革命戦争一建党建軍に進むことは、自分の足元をつきくずすことになるが故に一定の枠をこえないのである。もし、革命戦争に足をふみ入れようとすれば、旧来の政治、組織、理論を解体再編しなければならぬわけであって熾烈な党内闘争、党派闘争をひきおこさなければいけぬ。現に、口先だけで勇ましいことを言っても、両者とも、革命戦争にも革命的軍隊建設にも一言も触れることができないのである。中核派はこの典型である。

②中間二派連合と弱者右派連合の政治的位置

①組合主義・革マル主義の野合四派

両者の分裂が、かつてのBB連合と革マル、青解連合の分裂のような積極的意義をもちえないことは明らかである。ただ、革命戦争派と人民戦線派、合法主義・組合主義・軍事反対派とのますすあらわになる分裂のなかでゆれ動く様々な中間的形態を生みだし、それを通じて革命戦争のふるいにかけるという意味においてのみ、積極性をもちうる。この点で、弱者四派連合の右翼性は明らかである。青解、共革党、共労党、日向派の四派とも、その共通の基盤は、組合主義、経済主義、合法主義であって、共通のスローガンが「ソヴエト主義」である。軍事反対派ネオ革マルと

合法党としての党的力量の拡大（前進を中心とした機関紙活動）として現われるが、このメダルの裏は、議会主義、組合主義、合法主義への傾斜である。又、旧来の反帝反スタの綱領的立場は、現実の個別大衆闘争の拡大のなかでなしくず的に修正され、彼らの党派性は冲繩奪還と被抑圧民族、人民への自己批判運動だけという有様である。八派の分裂以降、彼らはいち早く戦闘的ポーズに転換した。だがポーズはポーズでしかない。全ゆる被抑圧民族、人民の闘いを支援し、できるだけ広範な政治闘争にする能力を党はもたなければならぬが、もしそれが権力闘争を組織する力量をもちえないなら一切は無である。中核は爆弾闘争や大衆武装については語れても、革命軍の組織化も非合法党建設についても語ることはできない。「口先のいかなる急進主義も、もしこれに必ず組織によって支えられていないならば無力である。」

（八木同志）ことは、六九年来の経験が教えるところである。大衆は口先だけの革命家にあきあきしているのだ。しかも、中核が、局面的に戦闘化すればするほど、政治的組織的矛盾は増すし、党内闘争を激化させないわけにはゆかない。もとより、このような事態は我々の歓迎するところである。大いにやりたまえ、中核派の諸君。我々は待っている。

プント連合派は弱者連合をソヴェト主義として対決の構えをとり、中核、四トロ連合とは課題別共闘をとりつつ、蜂起、戦争派の独自の潮流を形成しようとしている。ところで、蜂起戦争派のなかには、統一された赤軍も入っていて、二派の党的止揚をめざしているらしいのだが、残念ながら、我々は彼らを革命戦争派とは認めがたいのである。これまでの実績から判断しても、又、彼らが都市ゲリラ戦を全く無視している状況から言っても、待期主義の性格は変わっていないと考える。

だが、八派の分裂、ノンセクトの戦闘団化という条件の下で、革命戦争派を独自の政治潮流として形成することの必要性は、ますます大きくなっている。八派のどちらの隊列に行こうかと迷っている大衆、八派から離脱する傾向を強めている大衆を、革命戦争派の隊列に結集させることは急務である。その意味でプント連合派の待期主義、中間派的体質を暴露しつつ彼らとの政治的統一戦線を恒常化する必要がある。蜂起戦争統一戦線は現実的に可能である。そのなかで我々の公然部門、半公然部門を更に強化し、大衆戦線への指導を拡大してゆかなければならない。

争のサイクルとかみ合わなくとも、独自の権力闘争として、恒常的な政治闘争という性格をもたなければならぬ。もし、大衆闘争のサイクルに合わせて勝算のない作戦を敢行しようとするならば、それは決定的な誤りである。何故なら軍を勝利の力であり戦闘力の中核であるからであり、軍の建設をぬきにしては、又軍が弱体化してしまつては勝利はおぼつかないからである。この事は十分注意しておかねばならない。大衆闘争が客観的に要請し、又運動の飛躍の環となりうる様な、作戦行動はできる限り応じなければならぬが可能な範囲で行うべきであつて、一か八かの勝負を挑んだりしてはならないのである。この点からいけば、M作戦の過程で二〇数名もの逮捕者（実に九〇％以上にもなる）を出したことは技術的未熟さや権力の対応への立ち遅れではすまされることがある。しかも逮捕者の殆んどが、中央軍の最も優秀なカードであり、中堅であつたことを考えればなおさらである。

これらの兵士達の経験や到達地帯は組織全体としては継承され、ゲリラ組織たらしめてはいるが、この作戦を担った兵士の殆んどが捕虜となつたという事は、これらの兵士と同質の兵士を再び一から作り上げねばならぬことを意味するのだ。我々はこの苦い教訓をかみしめねばならない。

三、強制収奪闘争の政治的軍事的組織的総括

① ゲリラ軍への転換

この間の一連の軍事行動、特に強制収奪闘争は建党建軍一遊撃戦と規定される。七〇年秋期前蜂中止、路線転換の混乱を経て、前鋒路線から本格的な遊撃戦一革命戦争（路線）への転換と、（前段階）蜂起の軍隊としての中央軍からゲリラ軍への転換を媒介したのが一連のゲリラ戦であつた。新聞「赤軍」68では末だあいまいであつた路線問題もこの実践過程であいまいさをぬぐい去り、決定的転換をかちとつたのである。これが第一の根本的な意義である。

だが末だ都市ゲリラへの適応、徹底したゲリラ組織という点では不十分であり、旧来の中央軍的性格をぬぐいきれていない。それは、作戦の中央集権的、一挙的、連続的性格によくあらわれている。建党・建軍一遊撃戦ということは、敵の弱点を攻撃して敵の力を弱め、敵の弱点を拡大すること、危険な作戦、勝つておかない作戦を避けてこの中でも自己の戦闘力を保持しつつ、技術、作戦能力、武器奪取を一步一步高度化し、部隊を建設してゆかねばならないことを意味する。建党建軍一遊撃戦は必ずしも大衆闘

② 打ち破られた軍隊は

見事に学ぶ！林慶照同志の提起

何故敗北したのかという点については、M作戦の過程で捕虜となつた林慶照同志がリアルにふれている。（獄中通信69）この中で林同志は敗北の原因、軍の短命さを単なる技術問題としてではなく、軍の形成の問題として扱えかえし、そのために革命戦線軍候補生学校、軍というコースをとるべきこと、特に軍候補生学校の必要性を強調している。さらに、政治理論、軍事技術の習得、運転技術、科学、化学技術の習得、離散・集合の訓練、地理のマスター、変装・擬装の練習、合言葉や暗号の習得、肉體鍛錬非合法の研究、敵の動向、法律の研究等々を含む軍学校指導要項を作ることを提唱している。我々も原則的に賛成である。勿論、革命戦争というものは毛沢東も指摘するように、学んでから闘うというよりも、闘ってから学ぶ、闘いながら学ぶという本質的性格をもっていることを無視してはならないが、訓練も何もなく政治意識の高さだけで直ちに軍に入れるというようなことは避けねばならない。既にこのような点は実践的に改善されてきているが、より一層確実な方向をとる必要がある。また、軍学校の指導要項、訓練教程も革命戦争の発展に従つて徐々に高めてゆく必要がある。

③ 戦略的防衛段階の革命戦争の政治的要素

建党建軍―遊撃戦は、「赤い星」第1号でも、「序章」第5号八木論文でも指摘するように、日本革命戦争の戦略的防衛段階の闘いである。この初期の段階では革命戦争は、純軍事的色彩よりも政治的色彩が濃いという性格をもっている。(比喩的にいえば、政治的要素9に対して軍事の要素1というふうな)。反攻段階ではこの逆になるだろう。勿論、軍事が異なる手段をもってする政治の継続であり、政治そのものであることは前提)。ここから出てくる結論は、この段階におけるゲリラ戦・軍事行動に極めて大きな政治的配慮を要するということであり、革命戦争への人民の支持、結果を強め、誰が人民の敵で誰が人民の味方かをわかりやすくさせ、我々が敵を攻撃するのは正当であるということを人民に納得させるような周到な考慮が必要だということである。

この点の配慮を怠って「とにかく何が何でも武装斗争をやればいいんだ」という風に考えるのは冒険主義であり、軍事一点張りの視点であり誤っている。

ところでM作戦の過程でこのような周到な配慮が果してなされていたか?。確かに、銀行や金融機関は敵ブルジョアジーの階級支配構造の一翼を担っている。帝国主義段階においては時に、金融資本は帝国主義支配の基幹である。銀行は人民の零細な資金を

かき集めて人民への支配の道具にかえていること、従って、ブンド日向派のように「銀行襲撃は人民の財産の侵害」としてブルジョアジーまで人民の中に入れてしまふことが反革命的なのはいうまでもない。銀行から強制収奪することが、人民に損害を与えるものではないことも明らかである。

敵権力は、予想した通りギャング 凶悪犯キャンベーンをはってきた。一部の先進的大衆・新左翼大衆を除いて、このキャンベーンは一定の成功をおさめている。権力は大衆の即自的な私有財産防衛意識(特に小ブル層の)をかき立て、強制収奪・ゲリラ戦の真の意味、目的、政治的性質をおおいかくし、恐怖感をかき立てようとしたのである。「よど号」ハイジャックの時もそうであったが、この時には、むしろ乗客が九人の戦士に理解の目をそそぐほどの交流を可能とするほどであったために権力の思惑がはずれてしまった(一定程度は成功したが)。

権力のギャング・凶悪犯キャンベーンも大衆の即自的反発(民間協力として典型的に現われている。)も容易に予想しえたことであり、今のところ我々はこれに充分うちかつことも対応することもできていない。一方、銃奪取斗争や六・一七爆弾斗争は強制収奪斗争に比べて、政治的性質はわかりやすく、はるかに支持が高く政治的影響も大きい。この点では状況ははるかに有利である。従って問題は、このように人民の積極的支持も期待できず危険率も高い行動を何故に第一に選んだかということである。

① 都市ゲリラが都市で活動するためのほう大な資金の必要性

② ゲリラ戦の組織と行動を身に付け、部隊を建設する。の二点から考察してみよう。

③ ①に関しては必ずしも強制収奪斗争でなければならぬ必然性はない。②に関しては、資金調達が、旧来のような共産主義労働、カンパ、機関紙収入等ではまかないきれないことは事実である。だが、財産問題は単なる手段、技術として扱われなければならない、それ自体政治問題、組織問題として扱われなければならない。もしそうでなければ、物資、資金がなければ革命はできないということになり、社会のすべての資金、物資を支配しているブルジョアジーに勝てるはずなどありえない。我々がブルジョア権力に勝利するのは、人の要素・政治の要素・思想の要素を、武器の要素・物の要素に対して重視するからである。だから、資金調達の方法も革命の目的に整合し、党・軍と人民の団結を強め、革命の成長を促すようなものでなければならない。毛沢東の政治・軍事・生産を一体化した軍、革命戦争の陣型の継承ということを忘れてはならない。この点はしっかりと銘記しておく必要がある。

革命戦争の主要な攻撃対象は、敵の軍隊(自衛隊・米軍・警察)であり、それとの関連で国家諸機関、軍需工場などである。敵軍の武装解除が戦路目標である。この点からいえば、銀行などは二次的、補助的な攻撃対象である。財政困難を理由にして強制収奪を自己目的化することはできないのであり、また手段としても銀

行強盗は危険率の高くて現在のところでは全く割があわない。

④ 大衆が自分で自分を教育するのを助けること

強制収奪斗争自体、ブルジョアジーから収奪するのだから正しいと一人合点するだけではブント日向派の裏返しにすぎない。我々が理論的に正しいと考えていても大衆がその正しさを理解し、政治的性質をつかみとり、積極的に支持しようとならないならば、大衆が自らの経験を通じて正しさをわがものとするように指導しなければならぬ。このような指導、大衆が自分で自分を教育しその事によって指導者自身も教育され、指導者と大衆の間に生き生きした関係を作り出してゆくのが大衆路線である。このような方法をとらないでは革命戦争は勝利することはできない。大衆の政治意識を常に適確に把握し慎重な政治的配慮の下に軍事行動を行わなければならない。このような慎重な配慮の下になされない作戦は必然的に冒険主義に陥ってしまう。

革命戦争の初期の段階で、敵の圧倒的な制圧下で作戦しなければならぬ状況では、軍紀、作風にも大きな関連をもつ。ブルジョアキャンベーンと敵の凶暴な弾圧下で闘う兵士が、闘いの正しさを確信していないか、動搖したりするならば軍紀の確立、共産主義的作風などできない。そして人民の支持が高ければ高いほど、兵士は闘いの正しさを勝利の確信を強めるのであり、この関係は

直接間接にきわめて密接である。

勿論、大衆の即自的意識や自然発生性に追隨することは全く別であるが、一人よがりの軍事行動の危険性については絶対におさえおかなければならぬ。

⑤軍紀・作風を改善強化せよ

以上の点からして、M作戦の政治的軍事得失、軍紀、作風に關するより一層の総括を深める必要がある。今後我々は、赤軍の任務の明確化、中国紅軍の戦斗、工作、生産の三大任務の継承をどのように現実化するかという問題、また三大規律八項注意のような軍紀の確立を、現実的条件にあわせてすすめるなければならない。

軍紀、作風に關して、この間捕虜となった同志達は、予想される重刑、長期刑や、長期の留置場生活(平均百日以上に及ぶ)、接見禁止、様々な悩かつ、長期の取調べ(起訴後の取調べの常態化)等をはねのけ果敢に獄中斗争を継続している。この過程で、捕虜の転向率、自供率は低下し、自供や証拠品による外の同志への被害は大巾に減った。この事実は軍紀、作風が改善されてきて赤軍が名実ともに革命軍として成長しつつあることを示す強い証である。更に軍紀、作風を改め、完熟の貫徹、証拠品の処理などの指導を強めなければならない(政治宣伝の強化、拡大前提であり、この点は後述)

革命戦争路線と大衆路線を不可分一体のものとして堅持すること、それは単一の非合法党建設の問題であること、この二点に關する一層総合的体系的な提起が八木同志によってなされているので要点を整理しておく。

①軍——独立遊撃隊

我々の組織の活動の要は軍事活動——武装行動であり、組織の核心——核は、軍事組織、軍である。軍は、現段階では、少数から成る戦斗グループ、各々独立的戦闘力をもった少数から成る戦斗隊として存在する。軍は大衆から独立的、閉鎖的であり、政治警察との斗いの技術的職業的訓練をつんだ全国的組織(地方性、地域性にとられない)であり、徹底的な遊撃的組織である。a軍事技術、戦闘技術、武装力の発展、b不断の政治討論、作戦討論、点検、整風、鍛錬を通してのブルジョア社会の影響力や自己の自然成長性(閉鎖性からくる主観主義や、セクト主義)との闘いであり、それは一方で規律の発展として、他方で綱領、戦略、党建設として対象化されている。

□地下組織 支援網

戦闘隊の活動・行動は武装闘争を支える地下組織・専門的技能

四、党——軍——革命戦線を単一の

非合法党として建設せよ

①八木同志の提起を受けとめよ

革命戦争の開始と定着のなかで、公然たる政治宣伝、大衆工作支援網の拡大という面での立ち遅れは明らかである。この間の特徴は軍の力を主体とした革命戦争の力強い発展が大衆の共感や、信頼、期待を呼びおこしているにもかかわらず、それを組織し、我々の下に結集させる活動があまりにも弱いことである。この傾向は六九年來、一貫している。「赤軍のファンは多いが、活動家は少ない」とよく言われることである。どうしてこのような事態が起るのか、又、それを改善する方法は何か。

革命戦争・遊撃戦の戦略が確定される前には、軍の建軍一本槍の主張と革命戦線の大衆運動主義的傾向との対立が何度もあらわれた。著しい例は、七〇年四月の転換、革命戦線の解体、建軍の一元化路線であった。それ以降、革命戦線はほとんど機能マヒの状態におかれていたのであり、その影響が末だに尾を引いている。これらの点の総括は、赤い星の1で示しておいた。二つの傾向はいずれも一面的であり、これらの両者は計画的な非合法党建設として統一されなければならない、ということである。

地下組織——地下支援網に支えられつつ行なわれる。地下組織(U・G)は主要な地域に張りめぐらされる定着のなものであり、地区の委任代表としての革命家——訓練された中核集団を軸に、一方で戦闘隊と厳格な秘密活動によって結びつき、他方で大衆の奥深くに浸透してゆく、「決った形のないルーズな組織である。これは、戦闘隊の作戦準備——作戦と絡みつつ建設されてゆく。

②革命戦線

大衆の合法的運動の中に革命戦線を建設し公然非公然の活動を行ない、武装闘争と大衆の力と結合してゆかねばならない。大衆の中へ武装闘争への組織的系列、系統を造り出し、政治的・組織的・軍事的訓練を促進してゆかねばならない。革命戦線は戦闘隊員を補充し、増強し、また地下組織のルートを拡大してゆくと共に、大衆的ゲリラ戦への出撃の準備をし、力を蓄積しなければならぬ。(特に現段階では大衆的実力闘争の中での準軍事的なバルチザン行動の組織として)又、非プロレタリア的・合法的な党派との党派闘争・武装斗争に呼応し敵の弾圧に反対する政治闘争の組織など。

革命戦線は大衆組織の中にもとけ込む能力をもち、自在に活動する。革命戦線と大衆との接点・結びつきは、訓練された緊密な中核と支持する者・協力者、先進的大衆との様々な形態での自在

に変化する結びつきであり、その意味では革命戦線は訓練された緊密な中核―決った形のないルーズな組織の―係として存在すると云いうる。訓練された緊密な中核すなわち組織者であり、準戦闘隊員であり軍の戦闘隊の規律を自己の規律、地区の規律へと普遍化してゆくのである。

(四) 参謀部

最後に戦闘隊の司令部であり、かつ機能別スタッフ別参謀部として全体を統合し、軍事・政治・理論・組織・技術を一体的に結合する。

(五) 党建設―綱領・戦略・規律

この参謀部―戦闘隊―地下組織―革命戦線総体が、単一の党・すなわち綱領・戦略・規律に基づく単一の党的団結をもち、軍事活動・軍事闘争を環とする政治闘争―組織闘争―党派闘争の共通の活動・闘いによって結合する党であることを意味する。軍の実践はこの総体の建設として対象化され(敵の打倒と味方の建設)革命戦線の実践は軍―地下組織の力量・戦闘力と大衆の中への自己の影響力として対象化される。我々の闘いはその世界性、暴力性・社会性を成熟させ、ますます多面的に横へ横へ拡大―反復し

だがこのことは、政治機関紙が必要でなくなったことを意味するものではない。大衆への様々な、組織工作・大衆組織の指導・宣伝の総体の対象化および指針、政治意識の均質化、意識的結びつき、党派闘争の道具として政治機関紙は必要であり、党としての重要な活動である。赤軍派機関紙「赤軍」。新たに統一された赤軍の機関紙「銃火」の発行とともに、革命戦線全国委員会の機関紙の定期化が絶対に必要である。

革命戦線全国委員会の再建と全国的体系的指導体制の強化は急務である。特に首都に於て、半公然の大衆運動の拠点を確保し、大衆戦線との公然非公然の結合を強めなければならない。それとともに、各地方委員会の再建をかちとらなければならない。

(六) 赤色救援会を拡大せよ

救対に関しては新たに結成された赤色救援会の強化と大衆化、全国化が必要である。特に赤色救援会は様々な救対機能を維持させるとともに、大衆支援運動のセンターとして民間協力粉碎や破防法粉碎、弾圧粉碎、革命家の長期刑・死刑反対などの運動をできるだけ広範な政治闘争としてゆかなければならない。

様々な市民救対、地域救援会、救援センターや、H・J支援委等の組織との連携を強めてゆく必要がある。

ながら、自己の主體的質の全面的変革を志向しつつブルジョアの諸力、要素との錯綜した矛盾の中にある大衆闘争との間に、基本的に行動を軸とした関係をづくり出し、直接的・個別的には組織を通して、間接的・全体的には、政治新聞によって結びつき、戦略的遊撃戦―一斉蜂起へと導いてゆくのである。

(序章 65 ページ三六―三八)

(七) 革命戦線の全国化。体系化をかちとれ

ほぼ全面的に整理されているのでこれを前提にしつつ、次に革命戦線の当面する問題にふれたい。今春、革命戦線関西地方委の再編以来我々が直面した問題は一つは我々の活動が全国的な統一性・体系性・集中性をもてないことであり、一つは我々の活動が手工業的で大衆闘争の指導や組織工作が体系的に展開されないことであった。この弱点の解決の環が、全国政治新聞、機関紙の定期化であることは疑いない。党建設の環は、全国政治新聞と、それによって総合され集中され体系化される大衆運動が従来の我々や現在の八派の党活動の中心である。革命戦争の時代に入った今、機関紙と大衆運動が、組織の要となりえないことは明らかであり、軍事―非合法活動を組織の環としなければならないことは既に述べた。この点では、現在の我々には八派の合法左翼とは異った地平にいることを確認しておかねばならない。

五、統一「赤軍」結成について

(一) 革命戦争派。プロ独派としての共通の到達点

七月十五日、共産主義者同盟赤軍派の中央軍と日共(革命左派)の人民革命軍は組織合同を決定し、新たに「赤軍」を結成した。(詳しくはピラ参照)我々は、赤軍結成を日本革命戦争の偉大な前進と捉え、これを心から歓迎する。我々はこの新たな事態を正しくうけとめ、政治的軍事的組織的な前進を克ちとらなければならない。

赤軍結成にともなう様々な問題を整理してみなければならない。今回の合同は軍の合同であって、党の合同ではない。だが、我々の軍も革命左派の軍も革命軍として政治を統帥とし、党の指導を魂としているのであり、この点からいけば、我々と革命左派の共通の到達地平。一致点と論争点をはっきりさせておかねばならない。共通点は、革命戦争派・プロ独派としての実践的立場である。プロレタリアート・人民の武装闘争・革命戦争によって国家権力を打倒し、プロ独権力を樹立すること、革命戦争の主力部隊として党に指導された赤軍を建設し、人民の武装と一体化させること、

我々も革命左派もこの立場から、既に革命戦争を開始している。革命戦争派、プロ独派としての我々の団結は勝利か死かの革命戦争の厳しい実践の中で育まれたものであり、六〇年代の合法左翼の団結や統一とは比べものにならないほど強固である。我々の共通の実践的立場は、現段階に於て全ゆる左翼党派と決定的に一線を肅するものである。

② 論争を深化させよー反米愛国路線と

世界革命戦争・世界プロ独

① 反米愛国民衆解放民主革命の要約

我々の相異点・論争点は主に反米愛国路線の評価にかかっている。革命左派の基本的路線は、反米愛国である。京浜安保共斗の機関紙「反米愛国」の七月十九日号からその内容を要約してみよう。まず第一に、日本の国家権力を握っているのは、米帝とその手先日本軍国主義であるとされており、日本の軍事権力を握っているものは米帝とされている。したがって主要な敵は米帝であり、主要な敵は日本軍国主義、親米的独占資本であるとされている。

第二に、その理由として、在日米軍は、勿論のこと、自衛隊も米帝が支配している(その例としてキューバ危機 *cuba crisis* の時に首

相できえ知らない間に自衛隊が臨戦体制に入ったことをあげている)こと、又、日本経済も米帝が完全に握っていること(原料資源をおさえていること、企業を支配していることなど)をあげている。

第三に、革命の性格は何が主要な矛盾かによって規定されている。それ故、日本革命は反米民族解放民主革命であり、これらが成功したときに連続的に発展転化して社会主義革命が始まる。

第四に革命の主体 反米愛国統一戦線の階級構成は、労働者階級を主力軍、指導階級とし、農民を同盟軍とし、都市中小ブルを隊列に組み込み、反米的独占資本を少くとも中立にさせる。

以上がその骨子であるが、図式化すれば米帝による在日米軍・自衛隊の支配 国家権力を米軍が支配 主要な敵は米帝 日本革命は反米民族解放民主革命ということになる。革命戦争・プロ独・革命軍建設という点を除けば、ほぼ日共と同じ論理である。(勿論、日共の「人民的議会主義」、敵の出方論による暴力革命・プロ独の放棄とは決定的に区別されるし、従来の日共批判をそのままあてはめるのは誤りである)

② 世界的体系としての帝国主義

米帝が軍事的、経済的に支配しているという論理が全体の根幹をなしているから、この論理がくずれると全てがくずれてくる。

まず第一に、帝国主義は世界的体系であって一國的な視野から帝国主義が復活、自立したかどうかを規定することはできない。日本帝国主義は高度に発達した重化学工業独占体、金融独占資本を基礎にして、自衛隊、警察、官僚機構をうちたて、戦後の農地改革、食管制によって農民を支配基盤にくりこみ、財政金融をテコとした中小ブルの支配、社民、帝国主義労働運動を通じて上層プロの吸引によって権力を維持している。そして、六〇年代以降、東南アジアを中心として海外侵略を開始し、既に東南アジアの市場支配を確立した。

第二に、日本帝国主義は、敗戦による米軍占領、単独講和後の安保を通じ、一貫して米帝を頭とする国際反革命軍事体系の一環をにない、国際反革命軍事体系に助けられて復活、自立、膨張をはかってきた。帝国主義の世界体系は、ロシア革命に始まる過渡期世界に於ては、国際反革命同盟と国際通貨体制の生成、発展として示される。ヴェルサイユ体制と再建金本位制、ファンズムー統制経済と米ニューディール、英仏ブロック経済、戦後のNATO、安保とIMF国際通貨体制(その一環としての各国国独資材政金融制度)この発展は、世界革命戦争の戦略的前進との関係に於て唯一説明される。

NATO・安保国際反革命同盟は、米軍の世界的駐留と、三〇年代以降自動車、電機等の耐久消費材部門を付加して産業構造の高度化を達成し、第二次大戦中に流入した金の圧倒的保有(世界

の三分の二以上)を基礎にしたIMF国際通貨体制によって支えられた。だが、帝国主義の不均等発展EEC、日本の高度成長(重化学工業化の達成による国際通貨体制の動搖、再編(ドル危機)ベトナムを最先端とする民族解放闘争の戦略的前進、帝国主義階級闘争の激化 *escalation* に規定されて国際反革命同盟の手直し(力に応じて)がなされている。又、国際反革命とソ連スターリン主義の共同反革命、この両者の対抗関係としての戦後ヤルタ体制(冷戦 平和共存)も、中ソ対立、三プロット階級闘争激化のなかで解体、再編されつつある。

したがって、「日本軍国主義の対米従属」論は、ますます事態の進展にあわなくなってきた。 (日共の部分的手直し、帝国主義復活論はその反映)勿論、このことは、日米帝国主義の矛盾が帝国主義戦争に進んだりすることや、安保を解消してしまったりすることを意味しない。反対に、日米帝国主義が、世界革命戦争の前進に追いつめられて、次第に選択の余地を少なくしてゆくことを示している。ニクソン・ドクトリンは、米の核戦力一

海空軍力特殊部隊と前進に於けるカイトライ軍、シオニズム、人種主義勢力、旧植民地主義勢力の結合と、アジアに於ける日帝、ヨーロッパ、アフリカに於けるNATO勢力の政治、軍事、経済力による補完(それによって米地上軍撤退、ドル負担軽減・保護貿易主義・内政第一主義の実現)であり、一言で言えば世界革命戦争の前進による最前線(インドシナを始めとする民族解放闘争)

の瓦礫、後退、帝国主義心臓部での革命戦争の定着と内部矛盾、軋れき、ソ連社会帝国主義による革命戦争規制力喪失に対処する総力戦体制―反革命総戦略への移行である。

これらの要因は、歴史的、絶対的なものであり、帝国主義がくつがえすことのできないものである。日米帝国主義は、政治的経済的対立を深めながらも、国際反革命同盟と国際通貨体制の維持に追いこめられてゆくのである。

以上からして、日帝従属論は帝国主義論、国家論の誤り、国際反革命同盟、国際通貨体制と現代帝国主義との関連を世界革命戦争から規定することができないなど、総じて物事を一面的にみて全面的に評価しえない観点である。(第一次ブントの自立従属論争は革命戦争・プロ独の実践的観点をぬきに経済主義的、一國主義的評価に陥り、味方の戦略的前進によって敵の姿が規定されていることをみぬけず、敵の動向から味方を規定しようとする誤りを犯した。)なお、自衛隊を米軍が支配しているとしてあげられた例も、国際反革命軍事体系の第一次の重要性を示すものではあっても、そこから日本の軍事権力を米帝が握っているとする論理は出てこない。日本の経済を米帝が支配しているという例証も、国際資本の連携の密接さと矛盾、対立の存在を意味する以上のものではありえない。初歩的な帝国主義論の誤りである。(この論からいけば帝国主義は米帝だけで、他は全て従属国になってしまう。

隊―中央行政官僚機構―独占企業―帝国主義労働組合を彼らの戦略ラインとして組織し、それを国際反革命軍事体系の中核の一環にはめこむことである。その場合、ブルジョアジーの弱点と我々の優位はどこにあるのか? 1. 軍事的 政治的国際的弱点(アジア革命戦争の前進)、即ち我々の戦略的政治的な国際的優位。2. 資本制生産の周縁部(中小資本、農業、教育、地域、下層プロなど。)の矛盾の拡大、この周縁部の解体能力をもたない、即ち我々の戦略的社会優位。3. 戦略ラインに統合するイデオロギー的集約力をもたないこと、即ち我々の戦略的思想的優位。これらの戦略ラインの弱点を戦術ライン 政治警察―機動隊による大衆斗争の合法斗争への封殺、党・軍の壊滅、更に自衛隊(治安出動、支援後進)の前面化によって補おうとしている。

それ故、革命戦争は味方の戦略的優位に立脚し、敵の戦術ラインをマヒ、解体させ、そこから大衆斗争を総合しつつ戦術ラインに攻めこまなければならない。こうして革命戦争と党・軍が諸要素の環としてあることが明らかとなるのであり、八派の人民戦線左派への転落(その尖兵としてのブント日党派)、日共、社民の帝国主義労働運動への屈服、人民戦線との激しい党派斗争が必然となるのである。(以上「序章」第五号八木論文参照)

なお、親米的独占資本と反米独占資本を区別し、後者を味方に引き入れるか、もしくは中立化させるといふ試みの誤り、或は労働者階級内部の革命戦争派、人民戦線派左派(八派・右派)社共

帝国主義国と帝国主義国、帝国主義国と植民地・半植民地の関係は厳密に区別しなければならない。

(一)国際反革命軍事体系と世界革命戦争・世界プロ独

第三に、国際反革命同盟・国際通貨体制の動搖、再編、強化、ニクソンドクトリン反革命防衛総戦略と、ソ連社会帝国主義の規制力低下によるヤルタ体制の後退、動搖が、民族解放闘争、帝国主義心臓部武装斗争、労働者国家の根拠地化 三プロック階級斗争の結合 世界革命戦争の対峙から反攻への前進に規定されていることから、日本革命戦争の性格は日米両帝国主義打倒(自衛隊、米軍のせん滅)世界革命戦争としてなければならぬ。

日本革命の性格は何よりも世界革命戦争の前進に規定されているのであって、日本一国内の力関係のみによって規定されているのではない。日本革命戦争の勝利と世界革命戦争の戦略的反攻・世界プロ独樹立は一体でなければならない。

第四に、敵の布陣、支配構造と味方内部の問題について。敵の布陣は六〇年以降の高度成長、対外侵略、ベトナム戦争によって構造的変化をよびおこした。ブルジョアジーは史上初めて全面的な都市戦略に転換し(地主制 小作農保護 労働力の都市への吸収)、社会的支柱を、系統的買収と資本の専制―工場労働秩序の軍隊的組織化をテコとする帝国主義労働組合として育成し、自衛

・革マル)、帝国主義労働運動派への複雑な分解は物質的基礎をもっていること、これとの激しい闘いを無視したりする傾向の誤りと指摘しておく。

(二)安保粉砕・日帝打倒と世界革命戦争・世界プロ独

結論的に言えば、日本革命(戦争)と世界革命(戦争)―とりわけ米・アジア革命―との不可分一体性を否定し、もともと切離しえない日本革命と世界革命を切り離そうとするいかなる試みも反動的であり、一國主義への転落を免がれない。日本帝国主義打倒と日米反革命同盟粉砕は同時一体であり、それは一方で、世界革命戦争の戦略的反攻として世界帝国主義の反革命軍事体系とソ連社会帝国主義の打倒へつき進まなければならない。他方で日本プロレタリア独裁樹立から休むことなく世界プロ独樹立 世界社会主義共和国樹立に進まなければならないことを意味する。党と赤軍は、日本革命戦争の推進力であるのみならず、世界党―世界赤軍の萌芽であり、又世界党―世界赤軍建設のための国際的團結・国際的党派闘争を組織しなければならない。同時に、これらの闘いは、右翼ファシスト、帝国主義労働組合、社民・日共の人民戦争派との熾烈な党派闘争を貫き、八派人民戦争派・ソヴェト派の革命戦争派・蜂起戦争派への解体・再編・吸収をかちとらなければならない。

- ☆ 大陸革命戦争・帝国主義国武装闘争を世界革命戦争の戦略的反攻・世界プロ独樹立にむけて統合せよ
- ☆ 安保粉砕・日帝打倒・プロ独樹立
- ☆ 自衛隊・米軍・機動隊をせん滅せよ
- ☆ 帝国主義労働組合、社共人民戦線派、右翼ファシストを打倒せよ
- ☆ ソ連社会帝国主義打倒
- ☆ 八派ソヴェト派・人民戦線派を解体し、革命戦争派に統合せよ

- ☆ 世界党―世界赤軍―世界革命戦争統一戦線建設にむけて国際党派闘争を展開せよ
- ☆ 統一赤軍に結集し建党建軍遊撃戦を展開せよ

三里塚武装闘争を闘いぬけ

(1) はじめに

人民が鉞を握りしめた時、革命戦争の偉大を開始がつけられた。このすばらしい端初は今やあらゆるところに生々と根付き始めてゐる。日米帝国主義者を始めとするすべての反動派は孤立を深めつつあり、味方はますます有利になりつつある。革命戦争の開始は、人民戦線右派（日共・社民）及び様々な中間潮流（八派をど）の動揺と分解をしりぬけ、武装闘争こそが階級闘争の本質であることを明らかにした。そして我々は戦闘団として形成されはじめた革命戦争の萌芽を定着、持続、発展させ、次の段階にせん滅戦へと飛躍させるため、また敵のなかに一層の最後の悪あがきを打破するために、革命戦争路線と大衆路線の旗を高々とかがげなければならぬ。今秋、三里塚第二次取用阻止、沖繩返還協定批准阻止、自衛隊沖繩派兵阻止に向け、武装闘争と大衆実力闘争の結合をかちとり、敵解体・機動隊せん滅にまい進し、確固たる主潮流として革命戦争派を登場させなければならない。大衆実力闘争の拠点三里塚とゲリラ戦との人的、戦略的結合及びゲリラ闘争の一

以上のスローガンを我々は革命左派との論争と党内論争の深化にむけて過渡的なものとして提出する。

反米愛国路線の批判と論争は革命戦争の実践と一体のものとして今後一層深化させなければならない。赤軍に対する赤軍派・革命左派のそれぞれの党的指導を堅持し、自衛隊・米軍・警察への赤軍の革命戦争を発展させるなかで、単一の非法法党建設に進まなければならない。

- 統一赤軍万才
- 赤軍派・革命左派の戦士の団結万才
- 全世界人民・日本人民の戦士の連帯万才
- 勝利か死か
- 人民は必ず勝利する

層の深化のためにこそ、我々の三里塚闘争に向けた方針は設定されるのである。

(2) 三里塚闘争のしめる位置

三里塚軍事空港建設は、日帝の生命線となりつつある。とりも直さず我々にとっても、日米反革命軍事同盟体制とインドシナ人民を最先頭とする世界革命戦争との攻防の対峙段階を帝国主義心臓部での内戦から攻勢段階へ飛躍するための重要な環となりつつある。それ故に三里塚闘争はニクソンドクトリンとの闘い、すなわち沖繩―朝鮮―台湾―インドシナ革命戦争をめぐる国際的、国内的闘いと切り離せないものである。大衆実力闘争の復権を三里塚が荒々しく宣言する時、全ゆる意味における全面性を要求して、この要求に答え切り、権力打倒と全人民総決起をどの様に準備してゆくのかは一切、我々の建党建軍・遊撃戦を勝ちとる闘いにかかっている。

60年代後半の階級攻防の大会戦は、インドシナ革命戦争を牽引力として全世界の階級闘争を、帝国主義打倒の任務へと大合流さ

せ、権力闘争への現実的開始を要求した。しかしながら帝国主義心臓部での攻防を、反革命暴力による治安体制の全面強化でのり切った帝国主義者は、戦後の歴史過程の一大転換点を反革命防衛軍でのり切り、自己の矛盾を新たな反革命政策へと押し上げようとしている。インドシナで大打撃を受けた米帝は、いわゆるニクソンドクトリンにより、前線からの米地上軍撤退とカイライ軍によるその代行、空海軍の強化と補給、日帝の経済的テコ入れ、自衛隊の沖縄派兵によって核戦略体制と戦線を維持しようとしている。極東での前線戦略基地―韓国―台湾―沖縄と日本本土の結合をめざしたものである。日本本土における日帝の動向は、アジア侵略体制に向けた一層の反革命の遂行である。すなわち、破防法、入管法、部落弾圧、自衛隊派兵をテコにした軍事体制の強化と軍需生産―産軍複合体の形成と帝国主義労働運動の組織化及び基地機能の維持強化、食糧割解体、農料切り捨て等々である。

まさしくインドシナ抗米反日革命戦争の前進と朝鮮、沖縄での闘いは、この推移に対する真正面からの闘いである。そして、三里塚闘争もまた、日帝独占ブルへの真正面からの闘いである。現在、日帝の総路線との対決を政治、社会、文化領域にわたって展開し、無数の暴力に満ちあふれ、闘争と生産の一体化を実現させた三里塚は、大衆実力闘争の最前線に位置している。

この特徴は、①反対同盟を中心とした武装勢力の強固な結束と武装抵抗が国家的規模での亀裂を顕著にまた潜在的に進行させ、古い固定化された形態との間に交互作用を生み出し、合法、非合法の混在した形態を生み出しているのである。合法改良闘争、ソビエト運動へと流れる傾向をきっぱりと拒否し、実力闘争を深化する上で指導の問題が軍事を指導しうるものとして政治の質を伴いつつ顕在化し始めている。ここにこそ、我々が苦闘しつつ実現させ得たゲリラ戦の根本が存在する。単なる物量戦ではなく、個々人の思想と政治の厳密さを要求するのである。

②この問題は①の問題と密接に関連する。主体の思想とそれとの創意工夫を軍事問題はなほ一層要求するからである。青年行動隊は竹ヤリを鋭きすまし、火炎ビンを握りしめ、我々は鉄砲の手をかけた始めた。この間の6・17の機動隊せん滅、名古屋高裁爆破など爆弾闘争は急速に持続拡大し、その組織化が非合法体制を保証し始めている。爆弾闘争は、自立的戦闘団の成長を促進させ、地方軍Ⅱ生産と一体化したゲリラ軍の予備軍、兵站補給線を成長させるものである。自覚的規律と独立自主、自力更生を強化し、必らずや三里塚闘争はこれに答え切るだろう。自由分散主義と解軍主義（ソビエト運動派）との意識的闘争を通じ、カールドルの育成、指導の中央集権化、戦略的統一を計らなければならぬ。この任務は、我々革命戦争統一戦線の任務であり、党―軍―Rの構造をより一層強化し、遊撃戦を定着発展させることと切り離すことはできない。

それ故③の問題は都市戦略の確定と結びつくのである。我々は

自己の利害の擁護が実力によってしか計られず、この実力闘争が国家権力に対する階級闘争の一環をなしていることであり、この自己の生活全般を国家権力に対決させ武装を通して自己を組織させていることである。

②この闘いに触発され、政治利害の共通性、闘争との連帯を呼びおこされて、人民大衆が大胆に決起してゆくことへの意識性をあらわしている。

③闘争の持続的展開を通じて、全ゆる社会的、文化的影響を及ぼし、それを自己の闘いのうちに豊富化、全体化させてゆくことである。老人行動隊、少年行動隊のすばらしい闘いは、この証しである。持続的な攻撃的闘いによってしか、この影響は保証され得ないし、また闘争目標への意識性及び組織性を深化させることができないのである。

④そして現在、日常的な警察支配とその尖兵ガードマンとの対決攻防を通してゲリラ戦への明らかなき意識性があらわれ、闘争の未来と過去の全成果をかけて現在のゲリラ戦への意識性とその形態が確実に存在しているということである。

①いかなる時にも全ゆる武器と行動を通じて革命戦争の勝利に向けて闘うということがまさに第一次取用阻止闘争においてあらわれ、また生産活動と闘争の一体化によって戦士の団結とその規律が形成され、普段の政治学習によりその思想を高め上げている。それゆえ自己の力量を前進させ展開しうる組織形態を創り出し、

都市ゲリラ戦（戦略的防衛）と大衆実力闘争（全人民的政治闘争）の結合を通して敵の内部解体を準備するこの三結合の戦略的基軸により、戦術的に警察支配権力を打ち破り、人民戦線派、帝国主義派、右翼ファシスト派との闘争に勝利しゆくという一定の方向を明らかにしてきた。党が軍の規律、組織性と共産主義的武装闘争を貫徹することを通して、日帝の支柱たる独占ブルとその下での帝国主義労働運動、官僚行政機構と反革命軍隊Ⅱ自衛隊に対する自然発生的闘いを開始する小ブル、ルンプロ、学生、下層プロレタリア等の急進的街頭闘争及び被抑圧人民層の急進性と結合し、その分散性、自然発生性を共産主義思想、組織性を暴力闘争の中で統一させ、人民戦線派が各個別階層の課題を円環運動化させようとするのに抗して、その改良的秩序戦を克服し、街頭機動戦と工場プロレタリアの砲型戦を結合させるものとしてゲリラ戦の攻撃的展開が都市戦略の基本をなすのである。権力の攻撃を減少化し、分断攻撃を無視し、非合法一般、武装一般を語り、またこの闘いの困難性ゆえに、戦略的におまわりにも敵を過大視し何かしらソビエト運動一般を対置させたりするのは許されない日和見主義である。

(3) 三里塚闘争における各派の動向

第一次強制収容阻止闘争における諸党派の動向は、日共、革マ

ルの敵対は論外として、三つの傾向が表われた。一つは中核、日向派に代表される実力闘争を回避し、合法闘争、政良闘争及び政治暴動を主とするものであり、実力闘争の遺産を食いつぶし、人民戦線左派へと転落しようとする部分である。その第二は、青解、フロントに代表される機動隊とのそれなりの正面戦に向う、旧い形態の延長で政治決戦を開かうとする部分であり、その第三は、M.L.、プロ学左派、全共闘の一部によって代表されるゲリラ戦への移行を意識化しはじめているこれら三つの傾向である。

第一次闘争はこれら三つの傾向が混在し、権力の全面発動と赤旗を暴力装置に機動隊とその尖兵ガードマンとの全面闘争のもと、要サイ死守戦として展開されたのである。そしてそれは、ガードマン、警察の日常的対峙に突入するにつれ、益々ゲリラ戦への意識性が高まりつつある。また無原則的に農民闘争へ迎合し、人民戦線へと転落する部分は一切闘争の前進とは無縁な地平に落ちこんでゆくであろう。また疑さぬいへの政治過程的をかかわり方をする部分は、中間派として、一体どこに問題があり、飛躍への転換がどの様に形成されるのかに対し、全く無自覚であり、権力闘争を欠落させ、遊撃戦の断固たる開始と大衆実力闘争の前進という地平と人民戦線との間でブレをくり返し、反対同盟へのもたれこみやしはその政治生命を表現させ得ないでいる。我々はゲリラ戦への意識性を育てあげ、中間部分を獲得してゆかねばならぬ。

における戦士団結、確信、創意、工夫を一層きたえ上げた。ダイナマイトの登場とゲリラ戦の萌芽的出現は全く歓迎すべき事であり、より先行的、集中的な攻撃的ゲリラ戦を一層発展させ、なにかなんでもやり切らねばならない。この軍事的前進は全人民的政治闘争の深化と敵軍せん滅戦への号砲である。勝利への確信を深め、団結を固め、思想をきたえ、必らずや要求に答え切ろう！

☆ 人民の軍隊に赤軍に結集し

革命戦争を展開せよ！

☆ ゲリラ戦に呼応し、大衆的実力闘争、

支援網を拡大せよ！

三里塚―沖繩―朝鮮―台湾をうちぬく赤い糸は武装闘争である。世界革命戦争の帝國主義心臓部での爆発にむけ、この糸を確実にたぐりよせてゆかねばならない。全人民、全地域へ三里塚闘争の意義とその位置を宣伝し、同質化を計ってゆき、その根本、党！軍―R.F.と革命戦争統一戦線を堅持発展させよう！

スローガン

- ☆ 日帝の侵略反革命基地に成田軍事空港粉砕！
- ☆ 大衆実力闘争とゲリラ闘争を結合させよう！
- ☆ 第二次強制収用粉砕！
- ☆ 白色テロを粉砕せよ！

「付記」

7・26農民放送塔撤去阻止闘争は、権力との正面からの闘いを堅持し、また地雷、ダイナマイトなどが登場した。この闘いもまた高く評価し断固支持されなければならない。今や一切の政治的勝利は権力との攻防の全局の前進にかかっている。「第一次収用の残り分」としてようやくかたづけられたつもりの権力の安心をいつでも突き破ることは可能であり、合法性のワタを自らぬぎすてた権力の圧倒的な物理戦に対する我々の精神面、組織面、政治面

中国共産党の外交攻勢と我々

文革後、徐々にその姿を現わしていた中共の外交攻勢は、カナダ、ソ連との国交樹立からいわゆるビンボン外交、公明党訪中、トモを経て、ニクソン訪中決定へと発展し、新たな段階が始まったことを示している。特にニクソン訪中発表は、全世界に衝撃を与え、ブルジョアジーの混乱分裂をひきおこしているばかりでなく、プロレタリアート人民の中にも深い動揺と様々な対応をもたらしている。様々な憶測が乱れとんでいるが、ニクソン訪中—米中会談では国交樹立、国連への参加が決定されることはほぼ確実と、ブルジョアマスコミは観測している。

その真実の内容は時の経過が明らかになるであろうが、我々に於ても中共の今回の動きを、中共の全体的評価との関連において位置づけなければならぬ。一般的な評論ではなく、世界革命戦争、世界プロ独をめざす世界党—世界赤軍建設の実践的任務の総体の中で評価することであり、今後の動静を注視しなければならぬ。

(1) 中共—毛沢東主義の歴史的位置

中共—毛沢東主義の歴史的形成とその位置に対する我々の評価ものとして、持久戦陣型—革命戦争路線を確立しレーニンの蜂起—ソビエトの党を革命戦争の党—赤軍へと発展させ、戦争、政治、生産、教育の一体化を党—軍の構造に於て実現した。(軍—戦闘隊—工作隊—生産隊、赤軍—地方赤衛隊—民兵の三結合、党、軍の不断の整風)

(2) ソ連スターリン主義(とその裏返しとしての反スター主義)との党派斗争は、初期の陳独秀、李立三路線との闘いを経て、党—軍と抗日統一戦線の確立、中国革命戦争勝利に至る第一段階。抗美援朝斗争—朝鮮、インドシナ休戦と軍近代化、階級制導入—平和五原則外交—劉少奇路線—八全大会との党内、党派斗争(反右派斗争、三面紅旗)中ソ論争の第二段階。更に軍階級制廃止、全人民武装の復活から、ベトナム革命戦争—プロ文革—九全大会—三結合による革命委員会建設—「世界の農村が都市を包囲する」—世界革命戦略—根拠地化とインドシナ反帝統一戦線結成—現在までに至る第三段階。基本的に三つの時期にわたって形成されてきた毛沢東主義のソ連修正主義批判を世界革命戦争と社会主義建設との関連に於ても考察すると、次の諸点があげられる。(1)プロ独—権力奪取下での全面的包括的階級斗争—社会主義建設という原則の復活、發展。(人民内部の矛盾の処理について)(2)社会主義社会—プロ独という規定は正しいが、社会主義社会は世界プロ独の一段階であること。(3)プロ独下の社会主義建設と世界革命の一体化(反帝反修)(4)プロ独の主要な構成要素として党に指導

は、赤い星第一号で若干ふれておいた。(P 267-29, P 417-42)より詳細な評価は、『武装闘争と建党、建軍の諸問題』(八木健彦、序章 5)で行われているが、我々の見解とほぼ全面的に一致する。中共の外交攻勢を評価するためには、中共の全体的評価(戦略的評価)が不可決である。詳細な評価は上記論文を参照してほしいが、ここでは簡単に要約しておく。毛沢東主義と我々との関係を総括する場合、その内容は基本的に次の三点に於て把握されねばならぬ。(1)レーニン主義、とりわけ文革後の戦後共産主義(21年の転換)、23年に至る第三インターとロシア共産党の実践、その挫折との関係において、(2)世界革命と社会主義をめぐる闘いに於る(ソ連)スターリン主義との関係に於て、(3)世界革命戦争—世界プロ独と世界党—軍の建設の闘いとの関係に於て。

(1)レーニン主義の歴史の極限は、戦略的には速決戦(陣型)—国際的ソビエト運動の枠内にとどまったこと、その党が政治闘争—ソビエト—蜂起の党の枠内にとどまったこと、ソビエト運動が後退した時、この党と軍をめぐる飛躍に直面しつつ、それをなし切れなかったことにある。毛沢東主義は、レーニン主義の歴史の限界の止揚をソビエト運動の自然発生性の限界、後退を止揚するされた軍(—戦闘隊、工作隊、生産隊)を位置づけ、その下に民兵組織化。党幹部、軍、武装大衆の三結合としての革命委—プロ独国家機関。(2)武装斗争の普遍的原理、党の基準としての軍、(3)帝国主義変貌論粉砕、平和共存—議会議の批判、民族解放戦線の決定的位置。(4)「世界の農村が世界の都市を包囲する」—革命戦争で侵略戦争を打ち破る—攻勢戦略、インドシナ革命戦争との結合—インドシナ反帝統一戦線。インドシナ革命戦争の大後方としての全国の革命化。

以上の諸点は、反スター主義の犯罪性と対比して、革命戦争派—プロ独派としての我々の中国共産党との団結を可能にするものであり、又、我々が学ばなければならぬ内容なのである。同時にベトナム労働党—インドシナ各党、朝鮮労働党、キューバ共産党—OLAS路線、パレスチナゲリラの全世界の兄弟諸党、戦友への我々の評価を深化させ「全世界人民の戦士の連帯」を更に実りあるものにしなければならぬ。(上野、福田河同志のベトナム労働党の紹介、評価の作業は『序章』を参照、朝鮮労働党に於ては上野同志の論評、OLAS、パレスチナに於ては新聞「赤軍」66を参照せよ)

(3)①②の内容を確認するとともに、世界革命戦争世界プロ独をめざす世界党、軍建設の実践的任務との関連で毛沢東主義の評価を行なわねばならぬ。(当然日本の毛沢東諸派、先進国の毛派の評価を含めて)

(4)武装斗争—自力更生の原則は、ソ連の社会主義国際分業（社会帝国主義の支配）への批判としての正当性をもちつつも（平和五原則外交「国家間外交」もその枠内にある）。そこからの飛躍、世界革命戦争—世界プロ独にむけて世界党—軍建設が問われていること。それは又、中間地帯論—周辺革命論の残滓と帝国主義国に於る反米愛国路線の止揚でもなければならぬ。（パキスタン、セイロン内戦への関係）

(5)帝国主義心臓部に於る毛沢東主義の弱点は、先進国も毛沢東派の分裂状況、経済主義—組合主義（社民内毛派）や人間主義（新左翼内毛派、特に米、仏、独）の大衆的実力斗争の段階にとどまっている部分（大衆の先進的部分）（ML派）。又、日共革命左派京浜安保共斗は革命戦争派として我々の戦友であるが、未だ毛語派を統合する力量はなし。この点は、マルクスのE主義批判、レーニンの帝国主義批判を継承—綱領的立脚点とし、諸々の人民戦線派、反スタ派の組合主義、合法主義との党派斗争を貫き、世界革命戦争、世界プロ独の戦略的観点から統合しをなければならぬ。

(2) 平和五原則外交と世界戦略

文化大革命の期間中、「造反外交」と呼ばれ外交活動は殆ど書店休業の状態にあったが、九全大会以降再び本格的な外交攻勢によって開始されるのである。

プロ文革の内容は、(1)②で述べているので省略するが、問題は、文革と国際情勢—外交政策との関連である。文革が、ベトナム革命戦争と強く結びついていたことは見逃がすことができない。そして文革の過程で外交部内部でも激しい斗争があったこと（外務部長の陳 格下で。t.c.）は周知である。とりわけ劉少奇批判のかたちで非難されたのは、民族主義国家の支配者との関係を密接化することを主題として、その国内部の革命勢力を抑圧し、革命斗争の発展を阻害したというものであり、その典型例としてピルマがあげられた。既に文革に先立って、インドシナ5・30事件と共産党の激減、スカルノ失脚に始まり、ガンジのエンクルマ失脚、中東戦争でのナセルの威信低下などがあつた。第二次バンドン会議は無惨な失敗に終っていた。

第一次バンドン会議を始めとするAA外交は、朝鮮、インドシナ休戦を頂点とする民族解放斗争の封じ込め（ソリドン、タイ、マレーシア、インドネシア、ピルマ。t.c.）の共産党の武装斗争、ゲリラ戦の拡大も同じく平和共存の枠内に封じ込められ縮小、停滞を余儀なくさせられた。日共軍事路線の敗北、中止も同一線上にあった（）に手を貸し、ソ連スターリン主義の平和共存政策の枠内に自らを位置づけ

乗りだして来た。

平和五原則は54年提案され、領土保全—主権尊重—相互不可侵、相互内政不干渉、平等互惠、平和共存を内容としている。平和五原則外交は、朝鮮、インドシナ休戦（54年ジュネーブ会議）、バンドン会議を頂点として展開された。云々までもなく、朝鮮、インドシナ休戦は、ソ連スターリン主義の冷戦（熱戦）から平和共存への移行を示すものである。中共は、米帝の革命戦争封じ込め、国際反革命軍事体系の強化の中でソ連の平和共存政策への妥協、屈服を強いられた。ソ連にやらせた人民解放軍への位階制導入、軍近代化が推進され、八全大会を頂点として劉少奇—実権派の党、国家機関の掌握が完成した。

これに対する毛派の反撃は、57年反右派斗争、58年三面社紅旗政策（総路線、大躍進、人民公社）を経て59年彭德懷解任（廬山会議）、林彪の国防部長就任と軍への政治工作の強化—四個第一、兩憶三查、四好連帯、三八作風。t.c.—民兵の再建、拡充が進められ、62年キューバ危機を契機として、中ソ論争が始まった。

かくて、64年政治工作条例改定（四個第一の普遍化）65年軍位階制廃止、林彪、羅瑞卿論争（羅瑞卿は、米の核に対するソ連の核抑止力や武器援助に頼るため対ソ関係を改善し、敵を「水際でたたく」速決戦方式を主張したのに対し林彪は、敵を領土深く誘い込んでせん滅する人民戦争戦略—持久戦を主張し、ソ連修正主義との関係改善はあり得ないとした。この論争は林彪の勝利に終

たのである。それは、後進国の民族ブルを基盤とする民族主義政権—軍事ボナパルティズム政権と提携しつつ（その反面、国内武装斗争、革命斗争を抑圧）反米斗争の環を拡大しようとするものであった。64年始めに『人民日報』で明示された中間地帯論は、その理論的骨格を提出するものである。

文革①過程で提出された林彪の「世界の農村が世界の都市を包囲する」という世界革命の進攻戦略（『人民戦争の勝利万歳』）はこの中間地帯論を修正した。即ち、林彪は、中国革命戦争の経験を総括するなかで武装斗争による権力奪取の普遍性を確認し、自力更生を強調しつつ、世界革命戦略としての「農村による都市の包囲」を確立したのであり、国家的レベルでの反米傾向よりも内部における革命斗争—武装斗争を重視したのである。64年の中間地帯論が第一中間地帯（A、A、LA）の斗争を重視しつつも、第二中間地帯（ヨーロッパ、オセニア）の米帝との矛盾の指摘に特徴があったの比べ、林彪は第一中間地帯での民族解放斗争への物質的、精神的支援、連帯を強調し、世界革命の旗を前面に押し出した。この点では、林彪の指摘する四つの矛盾（帝国主義と被抑圧民族の矛盾、社会主義陣営と帝国主義の矛盾、資本主義国内部のプロレタリアートとブルジョワジーの矛盾、帝国主義国家間の矛盾）は、64年中間地帯論では社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾が第一位におかれていたのに対し、帝国主義と被抑圧民族の矛盾が第一位にわかれていたことと対応している。更にチエロ

事件、中ソ武力衝突を経た現在では、ソ連修正主義は社会帝国主義へ転化したといふ認識と、復活した日本軍国主義に対する国際的斗争の強まりや、黒人斗争や日本の斗争など帝國主義内部の革命運動への高い評価がなされている。こうして、現在では中間地帯論的発想は後退し、修正されつつある。

例えば、毛沢東は次のように云っている。

「世界大戦の問題については、二つの可能性しかない。一つは戦争が革命をひきおこすことであり、二つは革命が戦争をおしとめることである。」更に、最近では、「新しい世界大戦の危険は依然として存在しており、各国人民は必ず備えなければならぬ。だが、当面の世界のおもな傾向は革命である。」又、「中国という刻印のついた兵器を革命勢力に与えてもよい、中国は世界革命の兵器庫ともならなければならない。」とも述べている。

このような発言の基底には「ひとつの社会主義國の最終的勝利は、自國のプロレタリア階級と広範な人民大衆の努力が必要であるばかりでなく、世界革命の勝利に期すべきであり、人が人を搾取する制度が全地球から消滅されて、全人類が解放されるのに期すべきである。」(毛沢東)という認識が存在しており、それは物質的支援に於ても実践的準備と連帯にうらづけられている。(戦争に備えて全國を革命化する。更に最近ではインドシナへの義勇軍派遣を示唆する「最大の民族的犠牲をも辞さない。」という声明とあって現われ、工業の地方分散や民兵訓練の強化などが遂行され

なければならぬ。

第一に、一連の國交樹立とニクソン訪中に示される外交攻勢が平和五原則外交の一環としてあること、但し、第一次の平和五原則外交(民族主義政権との連携と國內革命斗争の抑制)とは異質の、即ち、民族解放斗争被抑人民の革命斗争支持の世界革命戦略とは対立、矛盾しないそれとしてあることが確認できる。それは、ニクソン訪中をほのめかしたスノーとの会見に於て「アメリカ人民に期待している」と語ったことや、訪中発表後、インドシナ革命戦争断固支持の態度をくり返し表明したことでわかる。七月十九日周恩来首相は次のように述べている。「我々は、まず、真先に解決されなければならないのはインドシナ問題であり、この問題解決に当っては我々はインドシナ人民だけでなく、アメリカ人民の利益にもなるように行動するだろう。アメリカ及び、その他参戦國のインドシナ撤退要求は、中米兩國人民間の關係回復呼びかけよりなお強いといえる」(読売7・20)「反スタ主義がやっぱりスタだ」と教条的に非難するのは中共の「原則には忠実で、しかも柔軟に使われる」(その基礎としての党一軍一統一戦線)という性格を理解し得ないからであり、反スタ主義の権立を示すもの他にほならない。

第二に今回の外交攻勢は「ニクソン訪中は兩國關係正常化に役立ちうる」(同発言)というのとどまらず、かつてのように全面的な影響力をもちえなくかってきた米ソ平和共存体制に更にくさ

ている。)

こうして我々は中國共産党の世界革命への実践的関わりと國內社会主義建設(プロ独強化)の一体化とを、レーニンの限界とそれを固定化し反動化した、スターリン主義の犯罪性との対比に於て確認することができる。だが最近のバキスタンやセイロン内戦に於けるような不十分性も依然として残っている。東バキスタン独立斗争やセイロン革命戦争に対しては明確な指示の態度を示さず、内政不干渉を唱えて米、英、ソ、インドの介入を非難している。バキスタン独立斗争のゲリラ戦への移行のなかで、西ベンガルの中共派ゲリラ派は國境をこえて結合しているのであり、この意味で二面政策(内政不干渉の國家間外交と内部の中共派のゲリラ戦への暗黙の支持)と言われている。今日革命戦争はインドシナを始めとして、LAやバレスチナ等全世界で國境をこえて結合し拡大している(大陸革命戦争)のであり、ベトナム労働党の言う「世界革命の戦略的進攻」は、早晩、内政不干渉という國家間外交と衝突せざるをえないであろう。世界革命戦争、世界プロ独の実践的任務はこの内政不干渉一般を克服(勿論、自力更生の一面としてのそれは、ソ連スターリン主義との斗争という歴史性をもつものであるが)共産主義社会の実現にむけた全世界人民の共同事業として遂行されなければならない。

③ ニクソン訪中と各派の対応

さて、以上の流れの中で外交攻勢—ニクソン訪中の意味を確定びをうちこむ意味をもっていることは疑いない。それは米ソの対応を見ればうかがえる。米帝内部では訪中そのものに反対する勢力は殆ど表われず、タカ派が分裂状況に追いやられている。勿論ニクソンの意図が大統領選めあてであることは疑いないが、それは単なる偶然や賭けではなく、インドシナ革命戦争の勝利的前進(ラオス作戦の敗北。etc.)と中國の國連加盟阻止が不可能化したことの結果であり、どのみちこのような方策をとらざるを得なかったであろうということである。戦争と同じく主導性を握っているということ、これが重要である。アメリカ内部の革命斗争にどのような影響を及ぼすかは速断できないが、長い目で見れば利益になるだろうということは言える。ソ連はどうか?ソ連は、米ソ平和共存体制がこれ以上解体し、自己の影響力と既得権を失うことを恐れているのであり、自己の支配的物質的基礎が侵蝕されるのを恐れている。だが、いざれにせよそのような方向に動き出していることは明らかであり、我々にとっても親迎すべきことである。

第三にインドシナ各党をはじめとする民族解放斗争はどのように対応しているか?一言で言えば、米中國交回復の如何にかかわらず、最後の勝利まで革命戦争を堅持し、自力更生の原則を貫くように強調されている。ベトナム労働党機関紙「ニヤンザン」は七月十九日「ニクソン・ドクトリンは間違ひなく失敗する」と題する社説を載せている。ニクソン政府が、南ベトナム臨時革命政

府の七項目和平提案に積極的にこれらることを拒否していることを非難し、更に次のように述べている。「一言で言えば、ニクソン・ドクトリンは米帝国主義の反革命的、世界戦略であり、それは米国の軍勢力と戦争手段に依拠すること、各地域で反革命勢力の同盟を形成すること、社会主義諸国を分断して、その一部を味方に引き入れ、民族解放運動に反対するためにこれを他の部分と争わせること、さらに社会主義諸国内部で反革命的な平和的変革を進めることから成っている」。「ニクソン・ドクトリンはまた、大國間の妥協を達成して、小國を彼らの取り決めに従わせることを図ることから成っている」。「その意志を他に力で押しつけ、大國が小國をいじめるのと同じように力にたよるのが帝國主義の伝統的やり方である。現在彼らはこのばかげたやり口を取り戻そうとしている。しかし、現在世界は変わった。白昼夢にふける者だけが、小國が自分の運命を自分の手に握るため立上ったことを理解できない」。「現代は諸民族が立上る時代であり、小國が大侵略者に打ち勝つこととさえできる時代である。ベトナムは広大な領土も大きな人口もなく、大國でもない。だがベトナムは一つ一ついくつかの大きな帝國主義に打ち勝ってきた」。「世界諸民族間の同盟、革命勢力間の同盟は偉大な無敵な力である。帝國主義者が世界にその意志を押しつけることができる時代は去った」。「ニクソン一派が敗北を認めるまで、ベトナム人民もラオス、カンボジア人民も戦い続けるだろう」。「わが人民の斗争の前途に、どんな

韓、台 seto への投資の運びかえ、日中議員連盟の拡大など、先んじて佐藤内閣の動搖として現われてきている。他方、日中国交回復運動の国民的盛り上がりとなって現われ、アジア、中国人民との友好、連帯の拡がり、アジア革命斗争の前進とプロレタリア陣地との結合として深まってくることを示すものであり、全人民の政治的動員にとって有利な条件とをなしていることである。我々は、革命斗争—建党、建军、建軍—遊撃戦を堅持し、大衆的実力斗争を更に発展させ結合を深め、自衛隊—米軍への戦略的優越を進めるとともに、上層の亀裂に介入し、くさびを打ちこみ、その下で民族排外主義との大衆的党派斗争として、日中国交回復—友好運動を組織してゆかねばならない。そして、朝鮮民主主義人民共和国、ベトナム人民共和国、南ベトナム臨時革命政府の即時承認と、安保条約、日「華」、日韓条約廃棄の運動へと進めなければならぬ。このように全人民の政治的動員の拡大は、一方で、革命斗争の有利な条件を形成することと同時に、入管体制との対決を軸にして日々、日帝の民族抑圧、分断、差別と斗っている在日アジア人民と国際主義的結合を強め、入管体制粉砕斗争の展開を有利に導くであろう。(71・8・1)

「補 足」

ニクソン訪中に対する諸党派の対応は我々が予想したように、

困難があるとしても、わが全党、全人民は一つの同じ意志で結ばれている。それは米侵略者が敗北を認め、わが国民の基本的な民族的権利の尊重に基づき解決を受け入れるまで、完全な勝利をめぐり争うという決意である。(7・19 説文)

ジュネーブ協定のおしつけを米、サイゴン政権による反古という苦汁をなめてきたベトナム労働党が大國間の妥協を警戒し反対することは全く正しい態度と云わなければならない。又、世界革命の戦略的進攻の鋒先をなしているベトナム革命斗争の指導的党—ベトナム労働党の決意と自負を見ておかねばならない。明らかに、最も原則的な態度であり、我々は断固としてこれを支持する。カンボジア民族統一戦線も自力更生を強調し、朝鮮労働党もベトナム人民の抗米救国斗争の断固支持と、ベトナム人民自身による解決を強調している。

既に見てきたように、中共の外交政策が「原則にはあくまでも忠実に、だが柔軟に適用する」性能のものであること、中共が第二のジュネーブ会議で大國間の妥協をおしつけるような可能性はないこと、(ただし、南ベトナム臨時革命政府の七項目提案、特に米軍撤退を条件としての國際会議開催の可能性はある。)にもかかわらず、大國間の妥協を警戒し、武装斗争を堅持することは全くもって正当である。

第四に、ニクソン訪中に日本国内の反応は上層の亀裂の拡大となつてあらわれ、独占ブルの日中貿易(中国市場進出)めあての無原則的な「木を見て森を見ず」という皮相な見方であり、「やっぱりスタだ」というだけのものである。例えば中核派は、ニクソン招待は「ベトナム人民を孤立させるもの」とする一方、先に引用したニヤンサン社説をしきりにもちあげている。「われわれは、中国の『ニクソン招待』という路線が文化大革命の結果登場した毛—林—周路線として、毛沢東の世界史的危機の時代における毛沢東—スターリン主義の世界革命運動に果す決定的な裏切りの本質を徹底的に明らかにし、反帝國主義、反スターリン主義、世界革命の立場こそが唯一今日の時代におけるプロレタリア世界革命の立場であることを明らかにし、全力で斗かわなければならない」。(前進第五四五号)この誤りは、第一に毛沢東—スターリン先入観、毛沢東の革命斗争、党、軍、統一戦線の歴史的意義の無視、第二に文革のブルジョワスキの評価と劉少奇実権派などのもちあげという点で裏返し(スタ)であること、以上の根本的誤謬に、世界革命斗争の新たな前進を見ないで旧来の立場(反帝反スタ)を保守的に確認するところに全く見当違いの評価が生れるのである。ソ連派が、ニクソン訪中を「米帝と取引して社会主義陣と反帝斗争を分裂させ、ベトナム人民の利益を損うもの」と非難しているのと全く同じである。ソ連派の非難が世界人民への共同反革命たる米ソ平和共存体制による既得権、勢力圏の防衛という社会帝國主義の醜いあがきであることは明らかであるが、中核派の場合には、旧来の反スタから先進國の自己批判

運動をかなりたてるなかで、「毛沢東主義の内在的批判」(前進中谷論文)に進もうとした地点から、再び旧業に戻ったわけである。

又、ブント仏派も「毛、周の平和共存路線への退却を粉砕せよ」として旧来のトロツキズムに逆戻りした。「問題の核心は、毛周の『国際共産主義運動における総路線』が導く周辺革命論、中間地帯論の破産を文革で総括せず、奪取斗争にすりかえた必然的帰結である。」これも又、全く見当違いであり、一体過渡期世界論の地平をふまえているのかどうか疑わしい。文革の核心がプロ独下の階級斗争の強調、革命戦争(人民戦争)と党、軍の決定的役割であったことを評価しないならばマスコミ的な「内部の権力斗争」としか写らないのは当然である。「中共が体制内矛盾論—中間地帯論—周辺革命の基軸にすえた主要敵たる米帝との講和—共存—国連加盟(議会議長への堕落)へ退却するならば毛沢東の『国際共産主義運動における総路線』は破綻し、ソ連と同列の地位に立つ結果となるのである。」(戦旗8月1日号) 破産したのは中共だけでなく、このように古ぼけた見方しかできない彼らなのである。米中北京会談を武装斗争に敵対するとしか把えないような近視眼では長期の革命戦争を闘うことなどできないであろう。我々を「無体系無総括無継承の軍事過程主義者」としか云えない単純低級諸君、革命戦争派を 称したいなら、一刻も早く革命戦争を開始することである。口先だけの戦斗性には我々も大衆ももうう

んどりしているのだから。

原則の中に無原則しか見ることができず、裏切りや混乱としか思えない連中は、自分の原則を持っていないことをはからずも暴露しているのである。ニクソン訪中によって米中平和共存時代が来るとか考えるのは幻想であり、世界がもはやこれ以上後もどりするものは敵からも味方からも孤立すること(佐藤政府のおたおたした対応を見よ)を意味しているのである。この点は、各国、各地域の革命運動の現実的条件に応じて考慮されなければならぬのである。例えば朝鮮南北会談がニクソン訪中発表に続いて行われているが、ここでも朝鮮労働党が南朝鮮の暴力革命と祖国統一の路線を堅持することが明らかにされている。他方、米帝とのよりシビアな対決と中南米革命運動の支援を進めているキューバは米帝との和解の意志がないことを表明している。これらの様々な対応は、一見矛盾し対立しているようにみえても革命戦争という一本の赤い糸で結ばれており整合しているのである。我々に於ても革命戦争をますます大胆に推進するとともに訪中がひきかこしている人民の政治的動員と政治的統一戦線の拡大、敵上層の亀裂に切りこみ拡大させ、主敵を孤立化させる闘いをすすめるべきではないのである。

(なお、上野同志の『ニクソン訪中について』を必ず併読された。)(71・9・5)

政治犯の指名手配書を抹殺せよ

革命家の長期刑、死刑反対！ 政治犯即時釈放！

破防法、白色テロ粉砕！ 民間協力粉砕！

※ ここに収録したピラは、大阪において行なわれた9・1集会の会場であるグループによってまかれた。ラである。現状を適確に分析していると思われるのでここに収録することにした。

統一革命軍 赤軍結成万才！
爆弾闘争、自衛隊攻撃万才！

革命戦争—ゲリラ戦の嵐が全国をおかっている。6・7機動隊爆破を口火として、ゲリラ戦は一挙に拡大し、深まった。成田の警備会社、名古屋高友、成田署、警視総監公舎、警官宿舎等が続けざまに爆弾をみまわれ、自衛隊員が刺殺された。赤軍派・京浜安保共闘の先達の闘いに導かれて、日本人民は武器をとり、闘い方を学び、革命戦争をおかものとしつつある。

このようにすばらしい情勢の中で、赤軍派の中央軍と日共革命左派の人民革命軍の合同によって新たに結成された「赤軍」は、

革命戦争の新たな段階を画するものであり、敵軍(米軍・自衛隊・警察)のせん滅に向けた本格的な革命戦争の主力軍として、司令部としての役割をはたすであろう。赤軍は、全ゆる軍事組織、独立戦闘グループとの、武器・資金・技術・アジト・作戦等の面における結びつき、提携の政治的、思想的、組織的結合を歓迎し、発効の用意がある。全ての革命的人民は、勇気と確信をもって革命戦争の大道を進もう。米軍、自衛隊、警察、右翼、反革命帝國主義者、社会帝國主義者を攻撃し、せん滅せよ！

公然・非公然の支援網を拡大せよ！ 赤色救援会万才！

帝國主義國家権力とその犬の政治警察は、革命戦争への弾圧

に騒起と存している。無差別の検門、捜査、逮捕、尾行、脅迫、懐柔、テロ、リンチ、長期拘留、実刑、接見禁止（塩見赤軍派議長らに対する2年近い接禁）、赤軍などの組織構成員であることを理由にした保釈とりけし等々、数えあげればきりが無い。またイヌどもが今、力を入れているのは「民間協力」である。自衛団や右翼の育成、マスコミを通じてのキャンペーン、捜査協力など。なかでも町中いたるところに氾濫しているのが政治犯の指名手配書である。しかも、逮捕状の出していない者までもが、〇〇派重要構成員手配書として写真入りで載せられるという悪どさである。賦、フロ屋、アパート、不動産屋、喫茶店、食堂、遊技場等、ありとあらゆる所にはり出されている指名手配書は、権力の末端支配の如実な現われであろう、反革命の象徴である。この様な具体的な行動を通じて、権力は革命戦線と人民のきずなを断ち切り、革命戦線を孤立させ、摘発し、人民の力と武器をとりあげ、支

配しているのである。この様な権力の末端支配に対して、人民は立ちあがらせ、闘いを組織しなければならぬ。残念なこと、革命の左翼の中にさえ、この様を闘いを他人事のように思っている人が多い。他人事はなかつた、と思いつらされる前に行動を開始すべきである。全ての指名手配書を破りすてよ！手配書の上にビラ、ステッカーを貼れ！手配書を貼るように強制されている店や人々に対し、警察への非協力を説得し、味方に獲得せよ！権力への通報者、スパイに公然非公然の闘いを組織しよう。権力への民間協力者に大衆的な抗議の嵐をまきおこせ！（抗議電話、ハガキ、抗議デモ等）権力への民間協力を粉砕し、革命戦争への民間協力人民の海を作り出せ！武装闘争に呼応し、支援網を拡大せよ！

赤軍派。日共革命左派共同集会に二百余名結集

※ 去る6月19日、大阪桜宮公会堂にて開かれた共同集会には、百名をこす警察の弾圧にもかかわらず約二百名が結集し、関西における武装斗争への強固な意志統一がからとられた。ここにその集會において採択された共同宣言を収録する。

6.19 革命戦争勝利人民集會共同宣言

日本共産党（革命左派）。京浜安保共闘

共産主義者同盟赤軍派。革命戦線

6・19革命戦争勝利人民集會に結集した全ての同志・兄弟達！！

全日本の革命戦士、人民諸君（日本共産党（革命左派）―京浜安保共闘と共産主義者同盟赤軍派―革命戦線は、全ての同志が革命戦争に立ち上がり、最後の勝利にむけて苦難の道を共に進んでゆくことを力強くよびかける。全ゆるる武器で、全ゆるる地域で、全ゆるる武器を取って、帝国主義の打倒に立ちあがる。

見よ！沖繩返還協定調印紛争に決起した日本人。沖繩人民の激烈な闘魂を！偉大な爆弾闘争万才！30名の敵権力を打ち倒した一発の爆弾の威力に敵権力はふるえあがった。逆に爆弾闘争は日本人民の革命的戦闘精神をゆり動かし、ふるいたたせ、勝利

の確信をうえつけた。

同時に闘われた大衆的実力闘争―パレード市街戦、竹ざお突撃戦、火炎ビン闘争、投石戦、バリケードストなどの様々を闘いは69年安保決戦以来、スケジュール的カンパニアデモに終始し、それを主要に担う八派（ソビエト運動派は革命戦争派にひきつけられる部分と人民戦線派に転落する部分とに分解してきた。今日の八派の主要な傾向である人民戦線派への転落と合法主義・カンパニア主義・武装闘争への公然たる敵対は、にもかかわらず、大衆の闘いを合法的枠におしとどめることができず、八派の枠をはみ出して戦闘化するぼう大な層を生みだしてきた。5・19祇園市

街戦、6・4大阪商大死守戦、神戸海軍館襲撃戦、そして6・15
〜17連続闘争。明らかに大衆的実力闘争は、安保決戦時の第一の
曲り角から現在第二の曲り角に立たされている。安保決戦時の第
一の曲り角は、赤軍派の前段階蜂起、日共革命左派の政治ゲリラ
斗争を生み出し、その対極に旧態依然たる八派のビンゲバ闘争を
生み出した。安保決戦敗北後の厳しい試練の中で、赤軍派、日共
革命左派はそれぞれ前段階蜂起、政治ゲリラ闘争の限界を正しく
総括して革命戦争路線へ遊撃戦争の道を進んでいる。他方、八派
のビンゲバ闘争はカンパニア闘争に後退した。第二の曲り角はこ
の様な革命戦争へ遊撃戦とカンパニアデモに分解する中で再びや
ってきたのである。革命戦争へ遊撃戦と結合して大衆的実力闘争
を堅持し、持続させ発展させるのか、それとも革命戦争へ遊撃戦
に敵対して大衆的実力闘争を放棄し、カンパニア化させ、人民戦
戦線派に転落するのかがどうかと。また、6・17闘争の中で、機動
隊に投石して逮捕される自衛官が出た。また第二の小西が登場し
たのである。ここにも革命戦争へ大衆武装闘争の前進があらわれ
ている。

全ての同志、兄弟達、日本人の皆さん、大阪戦争、東京戦
争、大菩薩、殺屋川著爆戦、ハイジャック闘争、一連の基地爆破
闘争を経て、昨年は12月の上赤塚交通騒ぎ、猟銃奪取闘争、徴発
作戦、さらにも本格的な革命戦争が展開されて来た。柴野同志や望
月同志の戦死を始めて、数百名の同志が逮捕され、負傷し、
荒れる大衆武装闘争、ゼネスト、ゲリラ戦の嵐、そして中国、北
ベトナム、北朝鮮、キューバなどの革命戦争の後方、日本革命戦
争は、この世界革命戦争の重要な一環をなしており、世界の革命
戦争と固く結びついている。世界人民の戦士の連帯万才！ 全て
の同志諸君、人民の皆さん！
アメリカ帝国主義を頭とする帝国主義者、国際反革命は世界の
革命戦争の前進に打ち破られ、後退し、また、帝国主義者相互の
矛盾を深めながら、動揺と再編をくりかえしている。彼らの最後
のあがきは、より大規模な侵略、反革命、抑圧を強めることによ
って、逆に革命戦争の泥沼にひきずり込まれようとしているので
ある。帝国主義反革命の最後のあがきに警戒心を強め、油断するこ
となく一層革命戦争の道にマイ進し、人民を思いきり立ち上から
せなければならぬ。

日本帝国主義者は、沖縄返還協定調印をテコに、72年自衛隊沖
縄派兵をおし進め、沖縄の日米共同反革命前線基地化をおし進め、
アジア反革命侵略の道を進んでいる。韓国大統領就任式への出席
に見られる朝鮮侵略の進展、四次防、三里塚、入管、中教審答申
司法再編、政治警察強化、破防法攻撃、など、攻撃を強めている。
権力の攻撃をはね返し、権力を追いつめなければならない。

沖縄、叛軍、入管、三里塚などの闘争を主要に担って来た大衆
的実力闘争は、今や重大な岐路に立っている。革命戦争へ遊撃戦
と結合し、大衆的実力闘争を堅持し発展させるのか、それとも合

捕縛として獄中につなわれ、また、長期実刑判決を受けて下獄し
ている。数多くの失敗、敗北、ボウ大な犠牲、幾多の苦難を通り
抜け、革命戦争は、だが、今や着実に芽をふき、大地に根を掛け、
真紅の花を咲かそうとしているのだ。勿論、我々の闘いはまたま
た小さく、我々の努力は未だ強大なものではない。敵権力のざら
がけにみま、凶暴な反革命的弾圧の中で、革命戦争派が圧殺されな
い保障は未だない。その意味で我々の闘いは、不断に危急存亡の
危機にさらされており、少しでも気を許すならば壊滅させられる
かもしれない必死の闘いであり、勝利か死かの闘いである。我々
はこの点について一切の幻想を持たない。

だが、すでに2年有余の試練を経て来た武装闘争へ革命戦争は、
日本階級闘争史上始めて長期の試練に耐え、持続させるという不
滅の金字塔を打ち立てて来た。今闘っている我々がたとえ全員倒
れようとも、革命戦争の烽火は後続する新たな戦士達に受けつ
がれ、絶やされることはないであろうと我々は堅く信ずる。革命
戦争が人民大衆と深く結びつく時、たとえ権力が戦車やミサ
イルを動員しても決して敗れることはないであろう。そのためにも、
我々は、今までより以上に、革命戦争を大担に、勇気と確信
をもっておし進めなければならない。

インドシナを最先鋒とし、中南米、パレスチナ、アフリカ、イ
ンド、パキスタン、セイロン、東南アジアなどを孤がり前進する
大陸革命戦争の嵐、帝国主義心臓部アメリカ、ヨーロッパにふき
法主義、カンパニア主義、人民戦線派に転落するのかがどうか、我
々は、大衆の全ゆる戦線の斗い、実力闘争、武装闘争を支持し、
支援する。我々は、革命戦争へ遊撃戦を支持し、連帯する全ゆる
闘争、全ゆる組織、全ゆる人々と無条件に連帯し、統一戦線を作
ることを望んでいる。そして、革命戦争を支える強大な地下組織、
地下支援網、大衆支援網に全ての党派、全ての人民の協力を心か
ら呼びかける。日共革命左派、共産同赤軍派の革命戦争統一戦線
に全人民が結合し、共に闘かわんことを呼びかける！

- ① 帝国主義心臓部の武装闘争と大陸革命戦争を世界革命戦争、
世界プロ独に結合せよ。
- ② 人民戦線派・ソヴェト派・蜂起待機主義を解体し、革命戦
争派に結合せよ。
- ③ 遊撃戦に呼応し、大衆戦線、支援網を拡大せよ。
- ④ 全ての戦線を武装闘争の前戦に転化し、ゲリラ戦に発展さ
せよ。

- ⑤ 革命戦争の勝利万才！ 日共革命左派・赤軍派の戦士的団
結万才！ 72年自衛隊沖縄派兵を阻止せよ！ 入管体制粉砕！
三里塚強制収用阻止！ 佐藤訪韓を日朝人民の連帯で粉碎せ
よ！

勝利か死か！ 人民は必ず勝利する！

一九七一年六月一九日

1 6・17の革命的意義

6・17沖繩調印阻止斗争で、鉄パイプ爆弾で機動隊の一部をせん滅したことは、日本革命戦争の持続、発展にとって多大な貢献をなした。その革命的意義は軍事的方法論の人民への拡大定着と世界人民の戦士の連帯によって決定的意義を持つてゐることである。

この二つの革命的意義と、爆弾問題が日本革命戦争にいかなる政治問題を課すのかについて、あらゆる革命家、革命組織は、充分考察しなければならぬ。

以下は、僕の考察である。

外で活動しているすべての戦士、獄中に補慮となつてゐるすべての戦士諸君が何らかの役に立ててくれる事を望む。

2 世界人民の戦士の連帯万歳！

@ インドシナ革命戦争の大勝利と
米日革命戦争への注目

1 『South Viet Nam In Struggle』
5th Year No. 92 March 20 1971

CENTRAL ORGAN OF THE SOUTH VIET NAM
NATIONAL FRONT FOR LIBERATION

(南ベトナム解放戦線中央機関紙)は、次のようなスローガンを一面トップにかかげた。

インドシナ三国人民は必ず勝利する、
世界人民の戦士の連帯万歳、

2 『VIET NAM COURIER』8th Year No. 314
March 29 1971 INFORMATION WEEKLY-DRVN

(ベトナム民主共和国)はトップに次のような記事をのせている。

「ラオスの次は何か？」

「それはアメリカ人民と世界の平和愛好人民にかかつてゐる。」
と言っているのである。

「ラオスの次は何か？」

ニクソンにとつてラオス作戦は大失敗であることが今や判明した。9号線戦において人民武装勢力はあらゆる技術を使って、比類なき英雄主義をもち、効果的な武器と戦斗手段で装備され革命的軍隊の強さを十分に発展させた。このような戦闘部隊と直面してはベトナムの最高の戦略や最も現代的な人殺し武器は効果がなないことが明らかになった。戦闘において飛行機や、ことにヘリコプターを使った機動力は米軍にとつて決定的な要因であるが、そのアメリカの金ピカ将校にとつて大事な機動力の神話がデタラメであることがラオス南部の闘いでバクロされた。ヘリコプターはハエのようにうちおとされたのだ。

空軍の火力はアメリカの戦略のもう一つの主要な要因であるが、まったくわずかし空軍力を持たない敵と対決する時、地上侵略軍の強さが限界まで制限される掃敵作戦の基礎にあるものであるが、この火力とて無慈悲な真実、つまりP.L.A.が敵を追跡してせん滅することはだれもふしとどめることはできない。——ということに直面しないわけにはいかなかった。

サイゴン軍の損害は増加してきわめて深刻なものとなつており、

あるものは、足もとの南ベトナムにもどるのはいつになるかと不安がつてゐる。アメリカの支配者がサイゴン軍にだしてゐた希望——最少の米軍と、アメリカ人民に反発をおこさせない程度の米兵の死亡率によつて遂行したいという希望は、はかなく闇に消えてしまったに過ぎない。このあわれなサイゴンカイライ軍は、アメリカ軍の指導により2年間以上も猛訓練を受け、高価な装備をしているにもかかわらず、今なほいくじのなす「ヒョウ子」でしかないのだ。

彼らの精鋭部隊は最初の衝突で解体した。残つて散開している部隊に一体何ができようか？

メルビン・レイロッドは、南部ラオスで撃墜されたアメリカ人飛行士を救うためだという口実を作つて、南部ラオスへの米兵の将来的な介入のための世論を作らうとした。もし彼がこのもくろみを遂行できなかつたとしたら、それは己の冒険が米軍にとつてさえ、あまりに危険きわまりないものであるからである。ラオスでの苦戦のあとでさえ、ワシントンのおえら方は、ベトナム問題で痛くなった頭に対する万能薬としてサイゴン軍を使うという考えにとりつかれてゐるのだろうか。南ラオスでの軍の崩壊のあとにニクソンが次に何をやるかが問題だ！

危険なバクチである。

昨年のカンボジアへの侵略の後、今年ラオス侵略をおこなつたが、そのどちらもが、まっけなく粉砕されてしまった。

彼は更に北方へ、ベトナム民主共和国への米帝空軍を使った、もしくはサイゴン軍か米軍の侵略という新たな冒險のり出すであらうか。

「タカ派」ニクソンのことだから最悪の事態が予想される。ニクソンと彼の支援するアメリカ独占資本にとって時間の猶予はつきようとしている。今もすでに共和党は一九七二年の大統領選挙キャンペーンを開始した。

アメリカ人民と世界の平和を愛好する人民の任務は、監視の目を強め、ニクソン政権をしてインドシナ人民の独立と自由を尊重した真の平和への道を歩ませるべく、より強力に運動をすることである。

3 4月26日南ベトナム解放民族戦線は、「反戦米兵を撃つな」という司令を発表した。4月からベトナムの新聞はアメリカの反戦闘争のことで一杯になっている。

「反戦米兵を撃つな」 闘うベトナム 第96 五・一 一九七一年四月二十六日、南ベトナムに在る米帝の侵略戦争に抵抗する米兵を攻撃するのをひかえよと宣言した指令書を明らかにした。

以下はORDBERの全文である。
大統領に就任して以降ニクソンは、侵略戦争を引きのばすためにベトナム化政策を遂行すべく必死に努力を続けている。ベトナム人民・ラオス人民・カンボジア人民に新たな犯罪行為をつみ重ね、

処遇を与えよ。

三、米軍における差別的な政策や、人殺しのための訓練に反対し、作戦命令に反対するため脱走しようと思っている米兵に反対し、援助と保護をさしおける準備を完全にしておかねばならない。

四、南ベトナム人民と武装勢力の側についた反戦米兵を歓迎せよ。彼らが故郷へ戻るのを援助し、又、彼らが望めば別の国で安全に生活するための準備をととのえよ。

五、個人・集団を問わず、民族解放戦線と南ベトナム臨時革命政府を支持する反戦米兵に対し適当な報酬を与え歓迎せよ。

南ベトナム人民解放武装勢力の司令部は南ベトナムに在る米軍のすべての部隊の将校と兵士に次のように呼びかけている。

故郷に帰還することを要求するため全力を尽せ。

ベトナムやインドシナにおける不正義の戦争で無駄死の道を屈辱的に進むのを拒否せよ。

援助をうけるため、反戦活動の情報を伝え、南ベトナム人民や人民武装解放勢力と接触をもて。

人民解放武装勢力はこの命令を真剣に実行すべきである。一方常に警戒心を高め、ベトナム人民に敵対する米帝國主義者に従い続ける者達には断固とした制裁を加えなければならぬ。

4. 世界革命戦争のインドシナ戦線の期待はアメリカ革命戦争

かつ合衆国人民にこれまで以上に無用な生命と財産の損失をもたらすようなインドシナ半島への侵略を強化拡大した。合衆国の真の利益と名誉と自由と正義を愛する伝統への忠誠のために多くの人々、アメリカ人民の広範な集団がベトナム帰りの米兵も含めてニクソン政権の戦争政策に反対し、全米軍の即時撤退を要求している。今も南ベトナムに在る多くの米兵も又、ニクソン政権に戦争をやめろとせきたてている。彼らは米軍指揮官の命令に反逆し、米軍の即時撤退を要求している。

ベトナム人民の長い闘つちかわれた人道主義の伝統を守るため、南ベトナム民族解放戦線と南ベトナム共和国革命政府はくり返し反戦米兵を歓迎し、補慮とさつたり、戦場で傷ついた米兵を人道的に取りあつかうことを言明してきた。現今の情勢とこの人道的政策にしたがって南ベトナム人民武装勢力は次のように指令した。

一、個人・集団を問わず、亡命を希望し、米軍指揮官の命令に反逆し、人民解放勢力に対する敵対的な行為をひかえる反戦米兵を攻撃するな。

サイゴン軍を支持せず援助しない、かつ南ベトナム人民の財産と生命を蹂躞するのをやめ、解放勢力のチュウヤキヤ、キムに対する闘いを妨害するのをさしひかえる反戦米兵を攻撃するな。

二、個人・集団を問わず、人民解放武装勢力に敵対することをやめた米兵、又、反戦ビラを携行する米兵に対し相当の

だけではなく、日本革命戦争にも向っている。「沖繩—日本人民へ」と題する南ベトナム解放民族戦線の主張がそれである。

「アジア民族解放運動に対する基地沖繩」問題について「共通の敵米日反動と闘おう」というものであり、「日本はニクソン・ドクトリンのアジアにおける勝利のカギ」と米帝が考えており、「戦争のベトナム化というアジアにおけるニクソン・ドクトリンの第一を粉砕することによって南ベトナム人民は日本人民の闘いに最も効果的な貢献をなしている」共通の敵に対して共に闘おうと言っている。文中に「沖繩の全面返還」等、杜共と同じスローガンが出ているが、この記事の右下にある写真に「沼津の米海兵隊演習と米帝のインドシナ侵略反対・抗議デモをする静岡（沖繩の人々）」という解説がのっていることにはあらわされているように外国の革命については、その細部を理解できず誤る事はあるし、そのような社共うのみの文章があったとしても、全体はアジア民族解放対米日反革命という正しい認識にあるので、それは考慮に入れてベトナム人民の主張を受け取らねばならない。

「オキナワ」

「闘うベトナム」 第96 5月1日号より

日本人に訴える

沖繩は民族解放闘争に対する反革命基地である。日本における基地の半数以上を占める軍事基地体制によってオキナワは極東における最大の核ミサイル基地となっており、アジアの民族解放闘

争への弾圧の基地となっている。

一九六五年以来オキナワはベトナム戦争を遂行するに当って最も重要かつ、米国のための兵站部をになう基地へと変貌した。

日本平和委員会の統計によれば、日本反動政府は米国に南ベトナムで使われた全ナバーム弾の九十二万発を供給した。百万台以上の機関銃、大量の鉄条網、軍用車、その他人殺しの道具を供給した。ペトロフの「政治社会情報」紙の記事によれば、ベトナムで侵略戦争をしているアメリカ軍に一九六五年日本より装備された武器と弾薬とその他の軍需品の金額や、米軍の人殺し道具の修繕費を含め全金額は五億九四五〇万ドルに達し、前年に比して十六万増となっていることが明らかになった。その金額は増えつつも増加の十二万増となっている。

「アメリカはオキナワを無制限に占領することをたくらんでいる！」

一九七二年までに（オキナワを日本に返還する）という米日のベテンに対し今では誰もいかなる幻想をもっていない。

全ての人民は、米国の、オキナワを無制限に占領しようというたくらみは、米帝国主義者と日本帝国主義者の間で結ばれた軍事秘密の一部であることに気づいている。この策謀のもとづいてアジア地域における拡張政策と侵略政策を押しすすめるために、

伝統的な大春闘争（春闘のことか）のかわ切りの三月十五日の行動には五〇万人以上の労働者が参加し、六月二三日のデモはさまざまな社会階層の人民が一六七〇万人以上、一二〇〇ヶ所に参加した。「アメリカはアジアから消えろ！」「日米安保条約粉砕！」「オキナワを日本に！」という激しいスローガンが中にひびきわたった。

オキナワにおいても又、五千もの人民によって日本女性をひき逃げした米軍に抗議して、又、この殺人を陰蔽した日本政府に抗議する激しい闘いが十二月二十日に開かれた。

一九七一年初頭、一万人以上の青年を集めた集会で反米の声はあふれ、青年学生労働者は日比谷公園で米国とサイゴンのラオスへの侵略に抗議した。三月五日の夜、東京では六千人以上の人民が戦争をインドシナに拡大したことに抗議した。

「固く団結し、共通の敵を打倒し、勝利するまで進撃しよう！」
日本人民の民族の利益を防衛しようとする試みは正義のものである。帝国主義に対する闘いと同列のものであり、新旧の植民地主義や米国のインドシナ侵略戦争に反対する闘いと同列のものである。南ベトナム人民は日本人民兄弟たちの様々な闘いを全面的に支援し、日米軍事条約を破棄し、全てのオキナワを直ちに日本に返還し、日本より米軍基地を撤去することを主張する。南ベトナム人民はアジアに対するニクソン・ドクトリンの最初の第一歩である「戦争をベトナム化する」ことをいとめることによって

アジア人とアジア人を闘わせるという「ニクソン・ドクトリン」を現実化するにあたって日本は米国の奇襲部隊となるべく予定されている。米大統領は日本を「ニクソン・ドクトリン」のアジアにおける勝利のカギであるとみなしている。一方、日本反動政府は新たな米国のアジア政策を日本の利益に合致すると考えている。佐藤は軍事侵略条約である日米安保条約を無制限に拡張した。彼は声明でアジア情勢を安定化させるため、アメリカの肩代りをするとして、南朝鮮やブノペンやインドシナの他の荒国奴隷への援助は増加させた。日本政府はこのようにわざわざ、アジアの米帝の地獄行きの戦争に自らの運命をたくしている。

「オキナワ返還のための持続的闘い」

米帝国主義者はオキナワをベトナムの保有物へと変えようとたくらんでいるので、オキナワと日本中の人民は常に日本への返還を要求し抗議している。他のだれよりもよく日本人民は新しい米国のアジア政策と米帝国主義者と日本の反動政府との密約は日本人民の死活をまびやかしていることをも認識している。それで彼らは米帝と日本反動政府に対して闘っている。すばらしいことに、日本人民は反対闘争と南ベトナム人民への支援と米国のベトナム侵略戦争の引きのばしと、インドシナへの拡大に対する抗議と結合されて闘われている。一九七〇年だけをとってみても日本における反米闘争はかつてないほどの激しさをもってまきおこった。

日本人民に対しすばらしく効果的を貢献した。南ベトナム人民はアジアと世界の平和を守るにあたり、ベトナム人民と日本人民の共通の敵をきらいさっぱり打ち倒す闘いにおいて日本人民と協力して闘うため、米帝国主義者に激しい砲火をあげつつけるであらう。

⑥ 米革命戦争

さて、②で米日革命戦争に期待の目が向いていることを述べたが、これに米日革命戦線はいかに応えているであらうか？

先ずアメリカを見てみよう。

アメリカは何といっても「秘密文書ショック」というやつである。アイゼンハワーの時代からケネディ、ジョンソン、ニクソンに至る大統領、補佐官、国防長官等々の支配階級内最高政治委員会の内情がほとんど人民の前に暴露されかかっているのである。支配階級が今までどおりやっていたいけなくなったことのあるであり、アメリカ革命の明確な指標である。アメリカは七二年大統領選を待つことなく、革命戦争派のヘゲモニーで、NFIの提案の完全を受け入れ、ニクソン打倒を実現しなければならぬ。

世界共産党—世界赤軍—世界革命戦線を、といいつつも、今年のはじめ出された『赤軍特別号』には、ベトナム労働党、中国共産党、アメリカ赤軍等のことについては何も述べられておらず、

ベトナムが世界革命の進攻戦略と言っているのに、七二年蜂起をなどと、どだい世界階級闘争には全く根ざしていない路線しか出されていなかったのであるが、なぜそのようなビンホケ路線になつていたか中から想像すれば、国際地下活動が全然なされていなく、このことによると思ひし、今もそうだと思う。アメリカ革命の発展と日本革命との結合と世界革命戦争の進攻にとって国際活動こそ決定的に問われており、外の戦士諸君がそれをやってくれるのを望むだけである。在日米軍、とりわけ黒人G.I.への組織工作は決定的に重要な意味を持っている。

◎ 日本革命戦争

6・17闘争は世界人民の戦士の連帯の形成にとって決定的に重大な意味を持っている。

インドシナ戦線、アメリカ戦線、これらが沖繩を媒介にすべて関連している。従つて6・17での機動隊の部分的せん滅は、このような広さをもつた政治によって正しく位置づけられなければならぬし、6・17以降の日本人民への政治教育もそのような政治によらなければならぬ。

日本の諸党派の機関紙を見ていると全く第二次大戦をプロレタリア人民の側から越えるような政治がなさい。このような広さを示すべく、①—2、3、4をのせた。

“赤軍からの手紙”

トリコンチネンタル 21・22号より

親愛なる同志諸君！

私は今、昨年私はハバナで書き取つた「赤軍」という記事の載つたトリコンチネンタル18号を受け取つた。我々は同志諸君が我々の声明を受け入れた事に対して感謝している。

しかしながら、記事の中に、つまり一二五頁の最後の二つの文章であるが、ここで多大な誤解を招き、又誤つた文章があることを非常に後悔している。このことを明確に表示してかかわばならぬ。

誌に載つた文章は次のとおりである。

我々はオキナワを日本と日本人民に返還されることを望んでいる。基地支配——米帝国主義と結託した日本帝国主義者の断えざる侵略政策と意図である。

しかしながら支配者にとっての問題は、この島が米國に属するか、日本に属するかということである。我々の支配されたオキナワを奪還する闘いの過程、それは日本の自衛隊は独立しては弱く、又独自の強固な装備を持っていないので米國の援助と後援なしには何もできない。このことによって明白になるであろう。

第二次大戦以前日本軍は非常に勢力があり、名声を博した。しかし、その強さも名声も戦後は衰えた。そして今日軍隊に対する人々の支持はほとんどない。我々はこの事について、なぜこうな

さて、第二次大戦で日本が殺し尽し、焼殺し、踏み潰したインドシナ人民が、今①—4で示したように訴えていること、これに應えて世界人民の戦士の連帯を実現したことはすばらしい事である。

「一九六五年以来、沖繩と日本は米帝のベトナム戦争の突撃最前線基地になっており、米帝のベトナム戦争はまさに日々沖繩からの発着によって行なわれており、南ベトナムで使用される総量の92%のナバーム弾、一〇〇万以上のマシンガン、大量の有刺鉄線、軍用車等の戦争物資が日本反動権力者によって米帝へ供給されている」のであり、これによって日々殺されている我々の兄弟ベトナム—インドシナ人民のことを明らかにし、世界革命戦争の政治で考えるならば、それを正当化し、守ろうとする機動隊をせん滅することは全く人民のさすべき事である。そしてそれをなした事はすばらしい事である。こうして我々は、「世界人民の戦士の連帯万歳！」を実現したのであるが、沖繩問題をどうしてベトナム人民でさえ日本平和委員会のような日本共産党系の意見しか知らないことに対し、我々の意見を世界人民に知らせることは重要である。アフリカ、アジア、ラテンアメリカ人民連帯機構執行書記局理論機関紙『トリコンチネンタル』の一九七〇年十一月—十二月号—一九七一年一—二月合併号に「赤軍からの手紙」というのがあって、我々の主張が徐々に全人民的に拡大しつつあるが、これは全くよいことであり、今後ますますこのような活動を強化すべきである。

5. したが、又、だれに責任があるのか、ということとは問題にしな

しかし同志諸君のより深い理解のために訂正した記事、と次の声明を断固として、又心から公然と呼びかける。もしも可能であればすでに発表した文章と次に述べるものと、訂正して公表されるであろう文章とをとり変えてほしい。

新しい文章

我々はオキナワが、全アジアへの経済と軍事の暴力支配と、日帝の軍国主義支配者の他の抑圧のきつかけとなるならば、日本への単なる領土の復帰だけを望んでいるのではない。日本の自衛隊は独立しては弱く、又独自の強固な装備を持っていないので、米國援助と後援なしには何もできない。我々はオキナワにおける日本とアメリカのすべての帝国主義支配に対して公然と攻撃する。

我々の最終目的はオキナワの解放である。それはオキナワ本國の日本人民が革命的共産主義のために団結し、帝国主義と闘う世界すべての革命的人民と闘うことよってのみ可能となるであろう。一方日本ブルジョアジーについては、彼らの持つ帝国主義軍隊は第二次世界大戦以前保持していた力と名声は失われ、人民の抵抗のなかで苦難の道を歩んでいる。しかし換言すれば、人民の支持と名声は、軍隊を増大させ独立させたのみならず、アジアへの侵入をも可能にした。今や日本の支配階級は日本人民の間に愛國主義と威力主義を促進している。我々は同志諸君の我々の

関心への理解を期待しているし、又、訂正して発表してくれたと共に感謝している。沖繩と日米安保条約に対する我々の態度を報告した我々の機関紙 RED・NOTE の最近発行されたものを同封したい。これを読んで我々の意図を理解してほしい。この中에서도印刷したいものがあれば記事に使ってほしい。我々はそうする事に感謝の意を表す。

勝利の日まで共に闘おう！

3 軍事の方法論の

人民への拡大定着万歳！

④ 日本革命戦争の歩みと 6・17 機動隊殲滅

1 大阪―東京戦争―大菩薩

この間の我々の歩みは、実際の前段階武装蜂起を貫徹する事はなかったが、本格的革命戦争を登場させるべき政治を日本階級闘争に持ちこんだことである。過渡期世界論が第一次大戦とロシア革命で終わっている事を、精神的生産は物質的生産とともに変化するという方法論にもとづいて、それから現代までの物質的基礎の分析へ発展させ、その中の中心事件は、第二次大戦と中国―朝鮮―ベトナム抗日―抗米革命戦争であるが故に、この

総括の上に、戦後世界再編をめざす日米帝国主義に対決することがこの大飛躍をなすようにしなければならなかったし、それは、我々の蜂起、その蜂起の、中国―朝鮮―ベトナム革命戦争との結合、そのように発展する部隊形成としての赤軍の建設、その内実はいかなるものになれ、なにがなんでも、こういう骨格的政治を実践しなければならなかった。

2 H・J―武器、資金強制収奪

これらは、いずれも地下体制の戦闘組織が単独で、作戦を貫徹するというものであった。

3 6・17 機動隊せん滅

6・17 での機動隊せん滅は、地下戦争組織の単独作戦ではなく、大衆暴動の中で行なわれたせん滅戦である。これが、いかなる組織によってなされたかはわからないが、これまでの地下戦争組織だけの行動ではなく、軍事の方法論を大衆戦線において、教育し、そこへ拡大させ、定着させるものとして決定的な意義をもつ。

それ故、今後、日本の革命武装勢力はゲリラ戦線（地下戦線）大衆戦線の両戦線において軍事の方法論を表現して行くという決定的に飛躍した革命戦争を行なって行けるようになったのである。

⑤ 爆弾問題は今後いかなる政治問題を

革命武装勢力に荷すのか？

① 政治の質は、「世界人民の戦士の連帯万歳」という、世界革命戦争の世界人民の政治でなければならず、それは、国際地下活動に支えられた、生きた政治でなければならぬ。

書物主義的、抽象的国際主義ではなく、自己の生きた活動（調査・工作・組織化、etc.）にもとづいたものでなければならぬ。↓「世界人民の戦士の連帯万歳」はそういうことを意識して、典型的な資料を集めたもの。

② 「機動隊をせん滅する事はよい事である。」という事、「革命家の死刑、長期刑反対」のリアルな政治宣伝、情宣能力を必要とする。ブル新の社説なんかで、過激集団はけしからんと言っている。これに対して、人民に説得力を持って我々の政治を貫徹するには、①のような活動が常時蓄積されていないと、一挙にすべてを下層人民へ理解させるのは困難であるが、それを組織活動を通じて、やらねばならぬ。

「機動隊諸君、せん滅されるのが恐ろしいければ、諸君は、これこれの事を止めたまえ」式のリアリズムにまで高められた政治。

③ 今後、荷せられる中心問題は、①、②よりも、実は、組織問題である。政治警察の反革命は増々高度に、ちみつに、大量

に、機動的に、無謀になってくるが、それに充分備えをもって対応しうる、戦争組織である。

④ 地下戦線戦争組織にとつて

。絶対に地下体制が権力にばれないように、全地下構成員に高度な政治警察との闘いのための教育・逮捕された時の自供の根絶。

。ある作戦、又は、日常的な政治警察との闘いで、犠牲者が出た場合、非常に長期の刑を受けるが、これを実力奪還しうる作戦までやりうるような、一つ一つの作戦水準の高度化の計画を持たねばならない。

⑤ 地下戦線組織工作にとつて

。大衆戦線への軍事の方法論が拡大する一歩が出来たが、今後、地下戦線戦争組織と大衆戦線への軍事方法論の拡大の影響力を結びつけるパイプとしての地下工作は非常に重要になる。

。地下の蓄積された軍事能力を大衆へ学ばせる事。大衆戦線へ拡大すること。これは、今回「沖繩」問題であらわれだが、今後、「入管」、「三里塚」、「釜ヶ崎」、「学園」、「米軍・自衛隊基地」等々へ、系統的に拡大されねばならぬ。

。大衆に学ばせると、大衆の創意が生み出され、地下の能力をこえることもあるし、そういうのを、地下へ組織し、地

下の水準を高める、大衆↓地下への組織。この方法で、地下組織を不断に組織し、建設して行くORRの計画性。

⑥大衆路線にとって

。地下戦線の性格によって今後、様相を一変する。反戦 全共闘は軍事の方法論が拡大すればするほど、今までの組織では見えなくなり、軍事の方法論にみあった大衆戦線が、新しく登場する。それは大半が地下に規定された革命戦線である。60年の安保共闘という政治勢力、60年後半〜70年代初頭の反戦・全共闘政治勢力は、革命武装勢力に再編され直して新しく登場する以外、ないのであり、それが下層人民に依拠した革命戦線である。

。6・17前後で、中核、青解、ブンド日向派らの内ゲバがブル新で云々されていたが、八派は解体し、生命を失ったものと見てよいだろう。あとはブルジョアの解体しかないよう軍が政治、組織、軍事的影響を与えることである。

。新しい大衆路線⇨革命戦線は、地下には、軍を持ち、合法、非合法部分で、当面この八派の分解の中で小グループとなる良質のグループを一方でオルグしつつ、他方、全く新しい、茶ヶ崎の暴動や、日大の爆発や、といった下層人民の組織化と、両者を結合しつつ、形成しきければならない。

⑦克一軍一戦線全体の組織構想について
。地下⇨大衆両戦線における軍事的方法論の拡大はもちろん今

ニクソン訪中について

上野 勝 輝

今回のニクソン訪中発表について、我々が考えなければならぬことについて、簡単にまとめてみたい。外の諸君の実践にかみ合わせて、役に立てて欲しい。

① 反動的評価反対

④ ブルガリアの非難（読売7/7より）

「ソフィア十六日発IAP」 十六日のブルガリア放送は、ニクソン米大統領の訪中受諾を「反帝勢力と民族解放運動を分裂させる手段」ときめつけたが、これはソ連圏初の公然たる非難である。

放送は「ワシントンの目的は中国首脳の現在の政策をアメリカの指導層の利益のために利用し、社会主義体制と民族解放運動に反対するイデオロギー、政治闘争を強化しようというものである。アメリカはこの機会を利用して世界の社会主義体制からの中国の分離をはかり、社会主義、平和、進歩に反対する米帝国主義の政治陰謀に中国を巻き込もうとしているのである。中国が同志たる

後、ものすごい試練をへるとして、迂途曲節を経ながらも、ベトナムの人民解放武装勢力のように、主力部隊、地方部隊、ゲリラ部隊（遊撃民兵軍、自衛民兵軍）のような構想を持って、計画的建軍をしなければならぬ。関東・関西に主力、地方、ゲリラを、全国に地方、ゲリラを、といった、関東、関西、全国地方、の三戦路地域の計画を必要とする。

。革命戦線はまた（準）であり、統一戦線の一つ一つの発展の中である飛躍点を持つであろうし、その時、（準）をなくさなければならぬ。政策は、組織が当面解決しうる、という組織に裏づけられたものとして出さねばならない。

共産主義、労働者政党との公然たる接触をしきりに拒否したあとで、ニクソン訪中の発表が出たことは意味深長である」と伝えた。

①「ワシントンが中国を巻き込もうとしている。」と云うのは大まかだ。事実、①ベトナム⇨インドナ戦争での米帝の後退、とりわけ第二のテイエン・ビエン・フーとして、ラオス侵攻作戦の完全な敗北と、②米帝内秘密文書バクロを頂点とする支配階級の分裂と、③広範な米帝内、世界の平和の声の中で、ワシントンが孤立しようもなくなって、後退しているのであって、ワシントンに主動性はならぬ。中国は、三月のベトナムとの共同声明にみられるように、一貫して、反帝勢力と民族解放運動の側に立っており、巻き込まれたいはしない。

②「中国が同志との接触を拒否して」「即ち、「頭ごし」にやっだからけしからんというのは、「頭ごし」にされたやつは）

法活動を準備せよ！

大したとしても、それだけでは、ダメなのであり、中国共産党がそれでは、米中会談を媒介にそういつた革命家の育成を世界的規模で育成する綱領と展望と活動と組織性を計画として持っているかというに、それは、我々にはいまのところわからない、ということとは、我々がそれを独自に準備しなければならぬ事を意味する。②の④、⑤、⑥を、没主体的に、「世界革命戦争は有利に

なる」と見るのではなく、有利にすること、①の②の③で、ハノイがガンとして米帝批判を今まで通りやっていっているように、我々も、ガンとして、革命戦争を推進すること、それを、世界政治の勢力変化の推進としてではなく、世界の社会主義的改造の点と結合させてやらねばならない。その中で、我々の革命党としての活動をやる中で、社会の最もダイナミックな活動分子は育成される。この育成こそ、中国の国内革命戦争のように、きたるべき

大世界革命戦争の推進主体となりうるものであり、我々は、これを主体的に、主体的に、計画的に最も大胆にやり抜いていかねばならぬ。

④ 我々の政治的任務

④ 日米反動の追討セン滅戦と世界の社会主義的改造の世界革命戦争の偉大な発展に備え、それを推進するために、より一層の国際地下活動と合

④ 我々の独自の武装闘争を必ず維持することが原則
⑤ 国際地下活動は、アメリカ内部の追討戦に備え、撤退米軍の内部に強固な赤軍のケルンを作るといふ武装した政治組織活動を非常に重要な課題としている。

これは、ベトナムの「反戦米兵を撃つな」や、中国の同様の政治の中で、将来に備えてそれを一歩越えた政治として「反戦米兵の中に赤軍を」として今から、我々の手でなされねばならない。追討戦の性格は、戦後処理として、カレーイ裁判のよりな形で、ベトナムで一部の反動司令官の処分要求などとして、反動派中堅幹部レベルで進行しているが、これを更に全上層の戦犯としての人民の裁判へ移行させ、又同時に全米軍の全米社会の戦犯としての断罪をアメリカ社会の社会主義革命へ転化する全社会的なものへ波及させる巨大な政治活動と結びついて行なわねばならぬ。

⑥ 国際地下活動は、世界革命戦争の運動の発展の展望だけでやるのではなく、世界の社会主義的改造のために階級的立場を貫くものとしてある以上、アメリカへ目をやるだけでなく、中国共産党へも目をむけ、中国共産党との綱領討議を不可欠とする。我々は中国によって頭ごしにされるような存在でしかないことを自覚し、地下活動で、それを克服して行かねばならぬ。

するならば、世界革命戦争の大追討戦として、世界人民の手によってほうむり去られるのである。このような条件が米中会談によって形成されるのである。そして、日米反動がその要求に反するであろうこと、それも充分ありうる事であり、そうならば、全面的な世界革命戦争が発展するのであり、我々の時代がやってくるのである。

⑤ ドミノ理論的波及

日米ではなく、インドシナ周辺では、米帝のカイライの頭ごしのひきまわしに対する不満と絶望が形成され、人民の戦争がそれ故に、タイ、マラヤ、ビルマ、等々、また朝鮮半島などへも大きく波及する可能性もある。

それは、又、多かれ少なかれ、同じ構造を持つ所への波及であり、パレスチナ・アラブ、アフリカ、およびラテン・アメリカの反帝反米闘争のより一層の前進でもある。

⑥ 撤退米軍の革命運動への参加の要素

ニクソン訪中で、ニクソンは孤立が安定化するわけではなく、自分から要求に反すれば、孤立は即滅亡への道へ直結しているのだが、ニクソンがあたりすさわらずを保ったとしても、米軍の撤

退は、人民の側から不断にニクソン（又は、彼に変わる米帝支配者）に対して問題をなげかけ、いろいろな対応をせまるのであり、この要素の革命への転化は全くありうることである。今、米軍は、第二次大戦後のそれとは違っており、第二次大戦後でさえ膨大な不満運動があったのに、今度は、ましていわんやである。アメリカのインドミナ化は、撤退米軍を媒介に急速に進展する。NFLの反戦米兵を撃つなどの司令、中共の米反戦闘争の特徴はその先頭に帰還米兵、退役軍人、現役軍人がいることであるといふ総括、など、その始まりを示している。

⑦ 幻想を持つてはならない！

⑧ 重慶交渉方式

読光 7/17 に、「毛戦略、最高潮へ、敵との交渉も対決の一部、重慶交渉方式の真価かけ」という見出しの星野記者の文章が載っている。それは、うまく要約している。

さらに、国内では、九全大会以後、毛主席の「重慶交渉」方式が全国的な「学習」の対象となっていたこと、「極左派」の排除に努めてきた事実も見のがせない。重慶交渉とは、抗日戦争の勝利直後（一九四五年）、重慶で行なわれた毛沢東・蒋介石会談をさす。学習の内容は、「情勢次第では、敵との交渉に出かけるこ

とも真正面からの対決である」とされ、交渉は、①敵側の内部に分裂があり、②一般に平和を望む気分があり、③戦争による必要な損害を避け、④相手の誠意をためす―ためであれば、さしつかえないというもの。その場合の心構えとしては①交渉に幻想は持たぬ、②武装、警戒を解かず、奇襲、うっちゃりに備え、③交渉を宣伝したり騒ぎ立てない―ことが指摘されている。これは、きたるべき米中首脳会談に臨む指導者の考えを、前もって納得させる周到な配慮といえるだろう。」

④シアンヌーク・インタビュ

七・一八説売は、「北京十七日発AFP」カンボジア王国連合政府のシアンヌーク殿下は十七日仏アンレビ特派員とのインタビュでニクソン米大統領の訪中発表を論評「毛沢東主席は周総理を通じ、ニクソン大統領は北京にくることはできるが、会談の成否は保証できないと伝えた」と語った。この記事を載せている。これは、あきらかに、中共が幻想はもっていないことを示していると見てよいであろう。

⑤ハノイの対応

七・一八説売は、「ハノイ十七日発日本電波ニュース」周恩来総理の招待をうけて、ニクソン大統領が一九七二年五月までに中国を訪問するというニュースは、日本時間午前九時現在、ハノイの各新聞、ラジオなど報道機関は一切報道していません。そして、ハノイの各報道機関は、引き続き、

我々も含めて、「頭ごし」にされるような存在でしかないことを知るべきである。しかし、すべて「頭ごし」に行なわれているのではない。

説売「中」ハノイ十六日発ロイター共同

パリ会談のグエン・チ・ビン南ベトナム臨時革命政府首歴代表は十六日、ロイター記者との会見で、中国が南ベトナム臨時革命政府の頭越しにベトナム問題でニクソン米大統領との取り決めを達成することはないと語った。ビン女史はその理由として「中華人民共和国は、われわれの独力のための闘争を支持しているからだ」と述べた。この記事がそれを示している。

⑥中国が平和共存に変質したという非難

四トロヤ、教旗の新聞で、「ピンボン外交」をこういつた点から見ていたように思う。四トロの場合、インド、パキスタン、セイロン問題としての中国共産党批判とそれ以外の点からの批判が混在している。ここでは一応インド、パキスタン、セイロン問題は除外して考える。

中共の「相互尊重、相互理解、相互不干渉、平和共存」という平和五原則は、ソ連共産党路線の革命の平和移行みたいなの、いわゆる平和共存とは違うものである。中共の平和五原則については、

「ニクソンはベトナム問題解決に関する南ベトナム臨時革命政府の七項目提案に対する回答を避け、引続きがんめいで好戦的である」と、ニクソン政権をきびしく批判している。こうした報道の姿勢からみて、北ベトナム側は米中接近の動きについては消極的な態度だ。したがって、ニクソン訪中の事実についてもすぐには報道しないだろうと、というのがハノイの見方だ。この記事を載せている。これは、②武装、警戒を解かず、奇襲、うっちゃりに備え、③交渉を宣伝したり騒ぎ立てないということである。

⑦世界の社会主義的改造はこれからである

世界革命戦争は有利なることを②で述べたけれども、その行く手は、難問の山である。米中会談が、世界的な勢力変化を促進させるとしても、それで即、世界の社会主義的改造というわけにはいかない。米中会談が、たとえ、ベトナム、台湾、国連問題である程度の前進をもたらしたからといって、その事が、アメリカ内部の白人・黒人問題とか、アメリカ内部の社会問題（失業、インフレ、住宅、公害……）や、日本の社会問題の解決をするわけではない。日中議院連盟など、日中友好が促進されても、そういつた中では、社会の社会主義的改造をなしうる、社会の最もダイナミックな活動分子たる革命家の育成はあり得ない。その土壌が拡

世界の社会主義的改造をいかに押し進めるのかということに關係して世界共産党建党過程で、組織問題まで含めた討論の中で問題にしないかぎり意味がない。

⑧世界革命戦争は有利になる。

⑨世界人民の平和の要求

①ニクソン訪中で、「きつと、ベトナム、台湾からの米軍の撤兵、ある程度約束が出来ているんだろう」と多くのものが予想し、「米中雪どけ」とか、「アジアの平和」とか、世界人民は、これで、きつと、世界の平和が大市に前進するものと期待し、中米、世界人民の平和の要求は、これであともどりが出来ないように決定的に促進される。

②この中で、世界人民の要求、願ひ、期待に反するものは孤立する。それは、ちやうど抗日革命戦争のあと、一九四五年、蒋介石と毛沢東との重慶会談があったが、そのあと、蒋介石が米軍と結んで平和をみだした時、第三次国内革命戦争へと必然的に行かざるを得ず、その時は、共産党こそ人民の期待の代表であり、それに反した蒋介石は孤立した。

③ニクソンの訪中は、じつは、ニクソンこそ最も孤立するのである。日米反動は、世界人民の平和の要求の中で、それに反

中国も、世界を語らうとすれば、「調査なくして発言なし」で、世界の調査を必要とするのであり、それは、不可避に中国共産党という党組織の世界共産党化を問題とせざるを得ないはずであり、それと我々は結合しなければならぬ。僕はインド、パキスタン、セイロン問題では、下層人民の造反には有理と考えるし、中国共産党がその下層に依拠しているかどうかに対しては、疑問を持つ。政治勢力と階級基盤の問題を見た時、「極左」とか「極右」というのは政治概念であり、その政治概念で、現実の階級基盤にねざした運動を切る傾向が登場するのは、その階級基盤にねざした活動がないことによると思う。ようするに、中国共産党に、「調査」を保証する活動がないということである。我々は、世界革命戦争の運動の把握と、社会主義的改造の基準の明確化・豊富化のためには、「調査」を独自にしなければならぬ。全世界の「調査」を、その一つが、最も重要な一つが、中国共産党である。これは、最も信頼されうる共産主義者の地下活動による以外には出来ない。何よって信頼されるかは、④による。

⑤国際活動は、地下活動だけの狭さにとじこもってはならない。合法活動を他人まかせにしておくと、ダメ。地下、合法の両活動を我々のヘゲモニーの不断の拡大の中でやらねばならない。我々のヘゲモニーで合法活動をやっておけば、地下活動がより大きくやりやすい。

あせて先ばししたり、誤ったことをしたりするのではなく、先ず、原則を確立するという事である。ベトナムに平和を、日本に革命戦争を、これこそ、ベトナムが「反戦米兵を撃つな」と言う直前に、かかげたスローガン「インドシナ三国民は必ず勝利する」。「世界人民の戦士の連帯万才」に応える道である。

◎ 極左日和見主義にならぬこと。

米中会談は、政治勢力の変化をもたらすのであり、合法的左翼気分が増大するということである。この気分は、我々、赤軍派のヘゲモニーをその中に確立しておかないならば、幻想が崩れる時、即ち一層の世界革命戦争が、②で指摘したように要求されてくる時、そのときになって、すみやかに革命の側へ対応出来ず、分解してしまう。我々が、この気分と無関係に、地下に規定されたものだけで、④の⑤の路線をつっぱしると、大衆の気分が分解するだけではなく、我々の勢力建設が狭まり、おくれ、同じく、一層の革命戦争が要求されるときに不充分にしか対応出来なくなるのである。その時、合法気分だった人民をののしって「それみる。我々のように地下武装闘争をやったからだ」と言っても、又は、自分の先駆的正しさをみせびらかして、「それみる。やっぱり我々の地下武装闘争路線の正しさが証明された」などと言った所で、一步も革命の有利とはならない。我々は、地下と合

⑥ 三里塚、沖縄、入管、叛軍、強制収容、等々の全戦線へ更に武装闘争を押し進め、赤軍を建軍し、更に大胆に革命戦争を押し進めよ！

ベトナムが、「反戦米兵を撃つな」とか、「七項目提案」とか言い、米中会談と、「話し合い」が階級闘争のムードを形成している時、我々が武装闘争をやる事は、戦略的に見て、ちぐはぐであり、我々もベトナムや、中国に歩調をあわせるべきか？否である。我々が武装闘争を押し進めるのは、我々が「極左」なのであらうか？否である。我々が武装闘争をやるのは原則なのである。ベトナム、中国は闘争をひかえて、武装はして警戒しており、我々は、闘争していても、それは何ら対立しない。毛沢東戦略が、我々の頭ごしにやっている事は、我々と独立になされているということであり、我々を規制するものではないという事であり、従って、我々も、この事に関して、毛沢東同志に何らうかがいをたてる必要はなく、独自に我々の活動をやってよいのである。軍事における統一戦線とは、戦略の一致のもとで、独自に軍事闘争をやってもよいのである。

（『人民戦争の勝利万歳』林彪参照）ちぐはぐを気にするのなら、過去ベトナム人民が革命戦争をやっているのに、日本やアメリカでは平和デモしかやっていなかったりした方がよっぽどちぐはぐである。我々が武装闘争をやるのは、能力以上のことをやるうとしたり、法が独自に進むのではなく、合法の方から地下の方へとは意識的には結合しない以上、地下の方から合法の方へ意識的指導性を貫徹しなければならぬ。この事は、地下活動家が合法運動へ頭を出して、組織的基準をあいまいにして半合法運動へと地下運動をゆるめ解体させるのであってはならない。

地下は地下で、断固一層能力をみがきあげ、大衆戦線へのカードの戦略的配置など合法活動を地下の計画に従属せしめるだけの指導を組織問題を厳格にした上で貫徹することである。

（一九七一年七月十九日）

米子の革命的四兵士を支援しよう！

七月二十四日、米子に於いて、M作戦を果敢に展開した赤軍四兵士は、圧倒的な権力の重包囲下に、ついに捕虜となった。

ハイジャック、上赤塚交番襲撃、一連のM作戦と、生まれたばかりの遊撃戦は着実に人民の中に定着しつつある。そして、本年にはいって打続く爆弾闘争の風は、権力との対抗軸を明確に戦争陣型をめぐる攻防へと煮つめ上げている。我々は、今、新たな時代への偉大な一歩を革命兵士たちと共に踏み出したのだ。

一九六九年の予定された敗北は、日本プロレタリアートに膨大な教訓を残しながら、しかし、多くの犠牲を強いてきた。かつて革命的左翼の中で先頭に立って闘ってきた良質な兄弟たちの多くは傷つき、獄中につながられ、そして闘いの困難さからあるいは、歴史のふきだまりの中でじっと身をよせあひながら、頭上を通りすぎる風を避けて人民戦線派へと後退している。唯一、ひとにぎりの兵士達こそ、今、我々がしっかりと守り育てねばならぬ人民の宝である。

民を分断し対立させる全ての策動に反対し、遊撃戦でこれに応ずる一切の闘いを支持するものである。

遊撃戦——革命戦争の烈火の如き展開は、我々に全く異質の飛躍を要求している。我々は、地底から轟々と噴出して来る人民の悪魔の如きエネルギーと結合し、武装闘争——大衆の実力闘争と結合する闘いを支持する。

革命戦争を支持する全ての諸君、我々の宝である革命兵士を守ろう。人民の軍隊がなければ人民の全てではない。米子の四赤軍兵士を支援する体制を我々と共に確立しよう。

我々は、米子でのM作戦で捕虜となった、酒井、松浦、近藤、福田、四赤軍兵士の差し入れ、接見、裁判等の諸活動を維持するため、多くの兄弟姉妹たちに、支援委への結集を呼びかける。

彼ら四兵士は、間断なくくりかえされる執拗な恫喝をものはねかえし、そして、起訴後もなお、鳥取県下の警察をたらいまわしにされながらも、断乎完黙を完徹している。又、現地で彼らに差し入れをはじめさまさまの救援活動に尽力している山陰統一救援センターの人々に対しては、「赤軍に関係している」というふれこみのもとに、徹底した「いやがらせ」が、組織的にこなわれている。差し入れに行くだけで、身元調査はもとより、リンチを

現在、歴史は我々の予想以上の転回を見せている。中国の、対米、対ベトナムの二面外交は、世界武装プロレタリアートが戦略的対峙段階から反攻へ至る過程を明らかにしている。米帝はインドクトリンの破産から、ドル危機の深化——IMF体制の質的崩壊は、インドシナ革命戦争のより強力な展開と全世界の革命戦争派の新たな登場を促し、就中、先進国心臓部における武装プロレタリアートの闘争を、より深く広く呼び起こすことにより決定的となるであろう。

日帝は、その力量を越えた反革命の一方の基軸たることを要請されている。国内に於ける行政権力の肥大化を軸に吹き荒れる反革命の風は、日帝の戦略的弱さを戦術でのり切らんとする死活を踏けた闘いである。

かりしも、赤軍派、日共革命左派両派の軍事組織の合同「赤軍」が結成された。我々は、この歴史的壮事を、人民の名において断固支持するとともに、米帝——日帝によるアジア人民、全世界人

うけるような状態にも屈せず、日々活動を続けている諸兄諸姉の闘いに感謝する。

最後に、今後の支援活動のために、圧倒的カンパを訴えます。なお、カンパを左記住所に郵送される場合は、偽名、偽住所でお願います。

米子赤軍四兵士支援委員会

連絡先 大阪市浪速区下寺町四一七―四

フジタビル 二号

関西モツブル社

電話(六三三)三六四九

銃 火

副 刊 号

- ☆ 日本革命戦争の本格的開始に向けて革命党建設
—「赤軍」強化・発展をかちとろう！

共産主義者同盟赤軍派中央委員会

日共（革命左派）神奈川県常任委員会

「赤軍」政治宣伝部

赤い星

第1号(1971.6)

- ☆ 世界革命戦争の戦略的諸問題
- ☆ 獄中同志の作風に学び、あわせて建党建軍活動
の強化のために
- ☆ 4・28闘争の総括と日本階級闘争の到達点

発 行 革 命 戦 線 関 西 地 方 委 員 会

赤い星 第2号 1971.9.25

発行 革命戦線全国委員会

連絡先 もっふる社

東京 東京都新宿区新宿2-17

TEL (03)-352-5876

大阪 大阪市浪速区下寺町4-7-4 フジタビル2F

関西もっふる社 TEL(06)-633-3649

30%